



次 目

聖訓摘要	……	日 上
新年の挨拶	……	佐 上
軍縮に對する吾人の覺悟	……	岩 井
皇道と法華經	……	井 上
年頭に方りて法國冥合を念す	……	藤 野
天理教の問答對詰の顛末記	……	生 田
法華經講話 (第十四講)	……	上 辰
記事	……	上 辰
	……	人 卯
	……	人 卯

○各地教信 ○寄附團費誌料領收

號月二年一十四第

財團統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追随ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ウテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シテ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ潤達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

定ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラシム事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金多百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方チ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方チ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ提出セラル、方チ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方チ誌友トス

聖訓摘要

日生上人

始聞佛乘義

この中には別段 摘出する所が無い。

諸人御返事

これは平賀の本土寺に御眞蹟が存在して居るので、非常に大切な御書だと思ひます。簡単なものから全文を御紹介します。

三月十九日の和風竝に飛鳥、同じく二十一日戌の時刻來す。日蓮一生の間の新請竝に所願、忽ちに成就せしむるか、將た又五百歳の佛記宛かも符契の如し。所詮眞言、禪宗等の謗法の諸人等を召合せ是非を決せしめば、日本國一同に日蓮が弟子檀那となり、我が弟子等の出家は主上上皇の師

と爲らん。在家は左右の臣下に列らん、將た又一閻浮提皆此の法門を仰がん。幸甚幸甚。(維新遺文錄 一七一四)

日蓮聖人のお考への中には公場對決といふ事を願つて居られたのである。丁度桓武天皇が南都の六宗を集めて、傳教大師をして法を論ぜしめて、最後南都の六宗を説服して、日本の佛教を統一したやうにいろ／＼の宗旨の學者を集めて、日蓮聖人は法の邪正を對決したいといふ事を考へて居られた。所が鎌倉にお居での時分には、讒言ばかりして法論對決に向ふ者が無かつた。それが日蓮聖人が身延の山に入つてしまはれてからといふものは、鎌倉の方で對決をするやうな事を言ふ者が出て來たのである、それも本當に日蓮聖人が鎌倉にやつて來たら、コソ／＼と逃げ込んでしまふのかも知らぬけれども、モウ鎌倉には歸らぬといふので、日蓮聖人は身延に入つたきりちつとも出られない、「モウ自分は決してこの山を出ないといふやうにして居つたら、彼等がさういふ事を言ひ出すか、言ひ出したら出て行つてどつちめてやらう」といふやうに日蓮聖人は考へて居つた。所が弘安元年とあるから、先づ身延に入つて丁度足掛五年になる頃、鎌倉の方で「イヤ、日蓮が居れば一つ法論をやつてやるのだけれども……」といふやうな事を言ふ坊さんが出來、北條の方でも「公場對決をやらしても宜かつたんだけれども」といふやうな事で、大分影辨慶が出て來た。そこでその註進が日蓮聖人の所に來た譯である、「三月十九日の和風竝に飛鳥、同じく二十一日戌の時到來す」とあるから、早飛脚を以つて鎌倉から身延の山に行つた譯である、「愈々今度對決といふ事が出來さうになりました」といふ知らせがあつたから、非常に悦ば

れて、「日蓮一生の間の所謂竝に所願、忽ちに成就せしむるか」と言はれた、日蓮が一考へて居る所の、この日本の佛教の是非善惡を一舉にして當否を決しやうと思つて居つた、この願が叶ふのかといふ悦びを述べられたものである。又法華經に説いてある所の後の五百歳にこの經が弘まるとあるその金言が事實になつて、茲に花が咲いて來る譯であらうか、何れにしても眞言、禪宗等のいろ／＼の宗旨の者を集めて、さうして佛法の正邪を決断して戴くといふことになれば、洵に結構な事で、さうなれば一舉にして彼等は皆數珠を切つて日蓮の弟子檀那とならざるを得ぬ、それは對決を公平にさへやつて貰へば一撃の下に彼等は皆日蓮の前に降服する者である、さうして日本國一同に日蓮が弟子檀那となるに極つて居ると斷言せられた。この所は實に東郷元帥が對島にバルチック艦隊を迎へた時のやうな工合に「我が艦隊は是より出動、敵を撃滅せんとす」と言つたやうな意氣が見えて居る、さうして「我が弟子等の出家は、主上上皇の師と爲らん」——一國の國師として日蓮の弟子等が、佛法の大事に就いては天皇陛下にも教を申上げるやうな事になり、日蓮主義で鍛へ上げた立正安國の精神を有つて居る者が、やはり天皇のお側にも仕へて日本の國に盡すやうになる、所謂立正安國の春を迎へ、桓武、傳教のその古へを今に見ることが出来るであらう。さうなればその次は一閻浮提に向つてこの法華經が宣傳せられるのである。「將た又一閻浮提みな此の法門を仰がん」——先づ日本が統一せらるれば、その次は全世界だと言はれた。

茲に日蓮聖人がどういふお考へであつたかといふ事が能く見える譯である。無論宗教であるから各個人の安心立命は言ふ迄もないことであるけれども、日蓮聖人の教は唯だ個人々々の信仰ばかりでなくして、どうぞ日本の全體の風教を統一しなければならぬ、又東洋の文明から出て、世界に光を顯はさなければならぬ、何もかも西洋の借物で、一から十まで西洋の後塵を拜して居るのでは情ないことである。どうかこの精神文化の中から最も善いものを日本が世界に與へなければならぬ譯である。昨日もお茶の水の女子高等師範學校で、加納治五郎氏と一緒に講演をしましたが、加納氏も言つて居つた、「何もかも西洋に頭を下げて居つたんではいかぬ、西洋を無闇に毛嫌ひするのもいかん、共に手を取つて行かんならんけれども、何時も此方が手を引かれて御厄介になるといふ事ではいかぬ、或る事は此方が先生になつてやらなければならぬ、それにはどうしてもこの佛敎に依つて開かれて居る東洋の精神文化の尊いもの、これは先づ日本が抑へて世界に之れを提供しなければならぬ。私は他の事はやれぬから柔道を以つて、日本には斯ういふ技術がある、チア來いといふので、各國にもいろ／＼さういふ腕づくのやうな事があるけれども、日本の柔道が一番強い、一番巧妙だといふ事を以つて、これ一つでも日本は馬鹿になるまいといふ事を知らせる爲めに私は骨を折つて居るのである、あなたは佛敎の爲めにやつて呉れる譯ですが、結構な事である」といふやうな事を申して居られました、どうしてもそれではいかぬ、何もかも西洋に頭を下げる一方では、却つて日本の價値が無いことになる。無論西洋の事を一概に

斥けることは頑固な話であるけれども、何もかも西洋に頭を下げるといふ事はない、殊にこの大事な精神文化の宗教、又道徳といふやうな事は言ふ迄もないことであります。日本が其處に自覺をせぬといふことは大なる謬見失態である、他の事は譲つても宜い、機械的の事は西洋に良い機械があれば、金を出して買へば宜いのであるから、幾らでも取入れるが宜い、けれども直接この人間の靈魂を取巻いて居る所の大事な精神の宗教とか、道徳とかいふ事まで彼等の尻馬に乗つて行くといふことになれば、洵に情ないことであらうと思ふ。幸に茲にこの偉大なる佛敎がある、モウ少し日本人の考へが進んだならば何が一番嬉しいと言つても、自分の國から世界的の文化を持ち出し得るほど愉快な事はない、今後ますます世界的に文明の惠澤を共にするやうになり、いろ／＼善いものを互に持ち寄つて、文化共通の生活をやるやうになつて、共存共榮して行く所の實に麗らかなる人類の文化が開けた時、そこに何物もこの文化に貢献しないで來た所の素寒貧の國民といふものは、如何にも恥かしいものである。その時分に日本は非常な尊い精神文化の土産を持つてこの仲に交つて居るものであるといふことになる。今の所では金の有る國と、無い國と、金の有る國の方が威張つて居るといふやうな譯だけれども、金ナンといふ物は先きに行けば同じ物である、何もそんなに威張る力はなくなつてしまふ、世界中が親類になつて御覽なさい、金などはどうでも宜い、「足らんければ此方から持つて行け」といふやうになる、共存共榮といふことになれば、親の物は子の物、亭主の物は女房の物といふやうな譯で、何でもなくなつてしま

ふ。最後の尊い物は即ちお前の道徳と此方の道徳、お前の信仰と此方の信仰、どつちの考へが善いかといふ、この精神文化が決戦點に残るものである。だからさういふ意味に於て日蓮聖人が、日本はいふ迄もなく往いては全世界にこの偉大なる教が及ぶといふ抱負決心をお示しになつた所は洵に大事な點である。これは決して頑固といふやうなことではない、これ迄捨て、しまつたら願掛けである、これだけは命に代へても守つて行かなければならない、他の事はマアドウでも宜いけれども、精神文化の已れの精神を托する所の一番大事な事だ、どうしても維持して行きたいものぢやと思ふ、それが判らぬければ馬鹿漢である。この國に取つて何が一番大事だ、それは喧嘩をする間は鐵砲が大事だ、軍艦が大事だ、他人行儀の間は金があるの、無いのといふことになるけれども、共存共榮といふ人道正義の觀念が普及して、皆が善い物同志を持ち寄つて、悪い物を矯して行くといふことに、段々文化が進んで行つた時分に、日本のものは何もかも皆悪いといつて捨てられてしまつて、一切を他に托することになつたならば、洵に淺ましい國民といふことになるだらうと思ふ。その意味に於て日蓮主義は、最後日本に花を咲かす力であらうと考へるのであります。

新年の挨拶

財団法人統一團 上田辰卯
理事 長

皆さん、新年お目出たうございます、どうぞ本年も宜しくお願ひ致します。

私は例年會館で風變りな經濟上の事ばかりお話をして居ります。それは宗教の事は僧侶の方も、又在家の方々でもなか／＼御熱心な方がお在でになります、私などが餘計な事を申し上げない方が宜いと思ひまして、餘り宗教團體で問題にならない經濟方面の事を、新年に申上げる習慣になつて居るのであります。

昨年暮に、或る經濟雑誌が斯ういふ事を書いて居りました。證券業者といふものは日本の財界を指導するとか、或は東洋の經濟を支配するとか、洵に大きな事を言つて居るけれども、新聞に載つて居る談や、或は雑誌の記事を見ると、唯其の年の經濟の状態を記述したり、或は翌年の景氣の觀測をしたり、さういふ占者みたいな事ばかりやつて居る、少くとも一國の經濟を指導するといふ責任を有つて居るものならば、一體此の經濟の組織形

態が今後どういふ風に變つて行くかといふ事に就て、モツとハツネリしたもの記述すべき筈である、それにも拘らず未だ曾てさういふ話を、何某談或は何々寄稿といふ中に一つも見ることがない、若しさういふことを知つて居つて言はないならば、それは世間を欺く者であるし若しそれを知らないで言ふとすれば笑ふに絶えたる愚か者だ、斯ういふ記事が可なり長く載つて居りました。これは別に私の惡口を書いた譯でもないものでありませうがチヨウド其の二三日前に、二つばかりの新聞に、これは記者が來まして、私が斷片的に話した事が載つて居りましたので、如何にも面當を言はれたやうに思ひました。しかし考へて見ると洵に尤もな譯でありまして、隨て新年の御挨拶に不似合な事ではあります、私はそれ以來考へましたことの概略を申上げて、皆様と御相談をして見たいと思ふのであります。

今の社會の状態、經濟の状態が完全無缺なものである

と考へる人は恐らく誰もないだらうと思ひます。これは私が社會主義に感染れた譯でも何でもありませんが、恐らく人間が作つた組織である以上、さうして又可なり此の組織が續けられて来た以上、そこにどうしても缺陷が生じ、垢が溜つたといふことは何人も否定しないだらうと思ふのであります。唯どうしてこれを改造して行かうか、どうしてこれを善い方に導いて行かうかといふ點にいろ／＼な意見の相違が出て来るのではあるまいかと思ひます。今日一方には大變金を持つて居る者もあるし、一方農村では其の日の飯を食ふことが出来ないといふやうな状態もある、可なり熱心な學者、技術家、優秀な者も金の支配の下に置かれて税の上らない状態が續けられて居る、斯ういふ事も餘り面白い話ではないのであります。しかし斯ういふ社會組織は一體どうして起つたかと言へば、言ふまでもなく封建時代といふものが切羽詰つて最後の土壇場になつて、それが崩れて今のやうな状態が生れて来たのであります。此の事は歴史の示す所でも異議がない所だと思ひます。

封建時代が瓦解したといふ事は、封建制度がモウ役に立たなくなつた、却て弊害の方が多くなつたといふ事の結果だと思ひます。封建制度も決して悉く悪い事ではないけれども、だん／＼積りて行く内に、例へば殿様の子言ひますか家老と言ひますか、さういふ人間が成べく上の者を馬鹿に仕立て上げて、自分が其の間に於て利權を得ようとした、さういふ結果であつたらうと思ふのであります。斯ういふ風になりましたけれども、しかし封建制度の始まつた當初に於ては、可なりこれが優良な役割りを演じたと思ふのであります、可なり偉い人間が出て来て、或は今の滿洲あたりの匪賊とか馬賊のやうなものを抑へて、其の領土内にある百姓も其のお蔭を可なり蒙つたのであります、やはり年月の経つと共にそこに弊害が生じて来た譯であります。

今日の資本主義と雖も、封建制度に代つて此の世の中を支配する制度になつたのであります、これも相當の年月を経まして決して完全無缺の状態ではないのであります、寧ろ不完全な事があちらこちらに起つて参りました、どうしてこれを直して行かうかといふ事が眞面目な人達に依つて研究されて来たのであります。御承知の通り、社會主義の考へ方としては、先づこれを打壊してしまはう、なか／＼穩かに話をして解らないから、一遍きれいに打壊してしまつて、それから新しいものを拵へようぢやないか、斯ういふ考へ方もありましたけれどもこれは外國では別の話として、日本では滿洲事變以來非常に勢力を失墜して、最早さういふことを考へて居る人

供、又其の子供といふ風に、若殿様といふものが所謂馬鹿殿様になりまして、殆ど政治の何もかも、經濟の何もかも知らないやうな人間が、たゞ代々續いた嫡男であるが故に政治を執つた。斯ういふ結果が非常な弊害を生みまして、有ゆる秀才も、有ゆる技能を懷いて居る人間も容れらるゝことなく、次々と埋もれて行く、斯ういふ状態に懷らないで起つたところの一つの革命であつたのであります。これは嘘か本當か知りませんが、落語家などがよく話します。加賀の殿様の屋敷で地震があつた時に家來は周章で皆逃げ出してしまつた、殿様が一人残つて座敷から逃げようと思つたけれども襖が開かなかつた、それは平生自分が歩いて行けば必ず誰か襖を開けるものですから、自分で襖を開けるといふ術を知らなかつたといふ話もあります。さういふ人が支配權を握つて居れば當然不平が起り、又社會の發達も阻害されるといふことは當然の話でありまして、是が封建時代の瓦解となつたやうに思ふのであります。これも嘘か本當か知りませんが、やはり前田さんの話で、亡くなられた漢子といふ方が、卵が丸いものだといふことを巴里へ行つて始めて知つたといふことでもあります。さういふ風になつて居つた。それは何故かといふと支配者が愚かであるといふのみならず、これを傳り立てて行くところの人間、番頭と

は今日非常に少くなつたのであります。しかしそれでは社會主義者が指摘したところの缺陷が、滿洲事變以來なくなつたのかと言へば決してなくなつたのではなくして社會改造の方法がモウ少し眞面目に考へられるやうになつて来たのだと思ふのであります。

そこでこれは一つの例でありますけれども、割合に世間の人の氣の付かないやうな點で申上げて見たいと思ひますのは、昨年の九月頃の事でありまして、御承知の電球を拵へるマツダランプ會社で、是は以前からの計畫であつたのでありませうが、軍事の或る重要な機具を發明致しましてその製作に掛つた、軍艦などには殊にそれが使はれる重要なものださうであります。さういふものを製造して日本の陸軍なり海軍なりが使はうといふ場合になりました、さて會社の資本關係を見ますと、日本人の所有して居る株數よりも亞米利加人の所有して居る株數の方が多いのであります。其の場合に製造される機具が日本の陸海軍に使用されるといふことは、若し資本關係から異議を言ひますとこれは成立しないことになる。社長以下技師長、技師、職工に至るまで、悉く首を減つてしまつて新しい者を拵えるといふ權利は、過半数を占めて居る所の株主にある。斯ういふ結果になると、日本の國防上重大な事になつて来る、どうしたら宜からう、これ

は亞米利加人の持つて居る過半数の株を日本人が過半数を占めるやうに買つてしまふより仕様がなまいといふので會社の人が亞米利加へ行つて、これを可なり高く買取つて参りました。さうして昨年九月にそれを持つて来てこれを日本人に限つて頒けるといふので、吾々も其の販賣の委託を受けた譯であります、そんな事實もある。斯ういふ事になりますと、今の組織といふものは餘程深く考へて行かないといふ矛盾した事が起つて来る。又こんな面倒な事でなくとも、少くとも今の事業といふものを見渡しますと、金を持つて居る者に氣に入らないといふことになれば、如何に熱心な社長でも、或は重役でも技師長でも、悉く首になつてしまふ、あの男は少し思想が悪いから、如何に熱心でも直ぐ首にするといふことが出来る。極端に言へば、少し鼻が低い、少し口が大きいといふことでも、厭ならば代へることが出来るのであります。さうなつては本當に眞面目な仕事が出来るといふか、斯ういふ事を吟味して見ますと、是亦可なり面倒な問題になつて來ます。

今日日本でいろ／＼の事業が華々しく發展して、世界を壓倒するやうな産業が起つたといふことは、これは無論資本の力に俟つものであります、明治の初め何んにも無いところから僅かな資本を集めて、さうしてこれだ

けの會社を起し、工場を拵へていろ／＼の事業を今日やつて行けるやうになつたのでありますから、其の功績を無視する譯にはいきません。しかし其の資本主義といふものが出来上つて見ると、そこに甚だ不自由なものが生じて来て、永い間にさういふ弊害が起つて來た。始めは非常に役に立つたが現在に於てはそれが少しのものになつて來た、もう少し経つとこれが其の弊に堪へ難い重荷になるのではあるまいかといふことも考へられるのであります。

そこでこれを如何にして改めて行くかといふ事に就て外國では暴力革命といふものでこれを改造して居る國もあります。先づ國王を首め所謂資本主義の支配階級となつて居る者を捕へて皆殺して、さうして革命を完成したといふ國もあります。又妥協をして不満足なる進行をしつゝあるところの國もあります。日本は一體どういふ風に進むだらうかと申しますと、どうしても今まで役に立つた資本の絶対支配権といふものを、これを幾分か國家なり或は民衆なり社會全體に移して行く、さうして今まで役立つた資本は又他の役に立たせる、斯ういふ方法を考へて行つて、そこに經濟的の賣買といふものを成立させて資本の合理的に移動を行はねばならない。斯様に私は考へて居るのであります。御承知の通り、社會主義者

日本で行はれてゐる煙草とか鹽とかの專賣や電車、電話等の國營、市營の無進歩な状態を見れば極めて明瞭に解るのであります、是等の點に就きましても皆さんと御一緒に本年は一生懸命に研究して見ようと思ひます。隨て今まで御無沙汰して居りました『統一』誌上にも時々それに關係した原稿を載せて戴くかも知れないのであります、其の意味で一つお讀みを願ひたいと思ひます。新年の御挨拶として甚だ不似合な事ではありますが、所感を申述べまして御挨拶を致します。(拍手)

私が考へますと、一昨年は其の前の年よりは此の必要が生じて参りました、昨年は一昨年よりもモット必要を生んで参りました、さうして自由經濟が統制經濟に移つて行くといふ事だけは、今日疑ひない方向のやうに考へられるのであります。しかし今日迄云ひ古された社會主義的の所謂統制經濟とか國營とかいふ事には、また非常に弊害がありまして、今までの生々した經濟が殺されてしまふやうな悪い缺陷が生ずるのであります、これは今



軍縮に對する吾人の覺悟

海軍中將 佐藤 臯 藏

一一一

私は宗教上のお話を皆様に乗上げるだけの素養もありませんので、今日の重大な時局問題になつて居る、軍備縮少の事に就て申上げて見たいと思ひます。此の頃軍縮問題が非常に喧しくなつて居ることは御承知の通りであります。軍縮といふやうな事は非常に重大であるとは思つても、戦争に比べるとそんな大した問題ではない、こんな風に考へて居る人が多いやうであります。なかなかさうではないのであります。御承知の通り日本海の大海戦に於て、露西亞の艦隊を全滅せしめたのであります。其の際に日本で失つたところのものはどれくらいあつたかと言ひますと、今日では見ることも出来ないやうな小さな水雷艇が僅に三隻、これを合計して三百噸に過ぎないのであります。ところが華盛頓條約に於て失つたところのものは主に大きな艦ばかりで約二十隻、其の總噸数は約三十萬噸であります。即ち華盛頓條約のたゞ口先だけで失つたものは、日本海海戦に依つて失つたも

の、約千倍になつて居ります。さうして其の結果はどういふやうに現はれて來たかといふと、簡単に申せば、華盛頓條約の出來たのが大正十一年でありまして、大正十三年には亞米利加から非常に輕蔑せられた結果として、御承知の排日移民法といふものが出來て、吾々は彼等から劣等民族の扱を受けるやうになつたのであります。これは必ずしも軍縮の爲めばかりではないかも知れませんが、これも、これが大きな原因を成して居るといふ事は吾々は十分承知して居らなければならぬ事でありまして、亞米利加からは其の通りであります。支那はどうかと言ひますと、是亦輕蔑せられた結果として、或は濟南事件となり、或は南京事件となつてひどい侮辱を受けたといふ事も皆さんの御記憶に新たなるところでありまして、其の次の倫敦條約に於てはモウ徹底的に總ての艦種に於て亞米利加より劣等になつたのでありますから、これは如何にしても取返しのでない結果になつたのであります。

す。是が爲に支那からも非常に輕蔑を受けまして、北支那方面、滿洲あたりが、所謂國民黨に降伏してしまつたといふのも、日本が支那から輕蔑されたといふことが大きな原因を成して居るものと私共は考へて居る次第であります。さうして國內ではどうかと申しますと非常に右と左に思想が分れたのでありまして、即ち五・一五事件となり、或は血盟團事件となつて現はれて來たのであります。

斯ういふ風に内に向つても外に向つても、國威の失墜といふ事は非常に大事な事になるのであります。若しも今度の軍縮會議に於て、華盛頓會議や或は倫敦會議の時のやうな失態を三たびするやうな事があつたならば我が國威は失墜するでありませうし、又内に於ては五・一五事件や或は血盟團事件どころではない、モット／＼ひどい擾亂が起るのではないかといふ事を私共は憂へて居る次第であります。

軍縮の問題は斯ういふ風に大事な問題であります。世間の人々の中には、若しも此の會議が成立しなかつたならば、どんな結果になるかといふ事に就いて心配して居られる方があります。或る人は軍縮條約が成立しなかつたならば軍艦を造る競争が起るだらうと心配して居る人もあります。又起らないだらうと言つて居る人もあり

ます。私共は自分の吐から申せば起らないだらうと思ひますけれども、しかし起つても少しも恐れる事はない、斯う考へて居るのであります。海軍の當局と雖もさうであらうと思ひます。樂觀論者の建艦競争が起らないだらうと考へて居る人は、日本が赤字で苦んで居るよりも亞米利加の苦しみ方は非常なものである、それは段が違ふ、一年に數十億弗といふ赤字を出して居るのであるから、如何に亞米利加が金持であると言つても、到底競争は出來ないだらうと言つて自ら慰めて居る人がありますけれどもこれは私は敢て採らないところであります。それは我と彼とは富の桁が違ふのでありまして、吾々が十圓を費すことはなかく、重大であると思ふけれども金持が千圓を費すといふことは何でもない、日本が千圓の金を費すよりも、亞米利加がそれに數倍する金を費すことは樂であるといふことを考へますと、そんな事で彼が日本と競争を避けるなどといふことは絶対に考へられない、そんな事で安心することは出來ないと考へます。寧ろ彼等は失業救済事業として今日、盛に軍艦の建造を急いで居るといふことを見ましても、競争する考があつたならば必ずやるだらうと思ひます。だから彼等は經濟上の關係から建艦競争をしないだらうなど考へることは吾々としては禁物である、私はさういふ見地からでは

なしに、彼等は建艦競争を企てても仕様がなと思つてやらないだらう、と斯う思ひます。

それは何故であるかと申しますと、一つの國が自分の擁するところの戦場に集め得る兵力といふものは自ら限りがあります、一番解り易い例は、日露戦争の陸軍の例でありまして、露西亞は自分の本國に於て、日本の陸軍の十数倍もあるやうな陸軍を有つて居りましたけれども距離の關係や戦場に於ける資源の關係に制限せられて大きな軍隊を持つて来る事が出来なかつた、それだから日本は勝つ事が出来たのであります。勿論日本の陸軍と露西亞の陸軍と比べましたならば、其の精銳なる程度に於て格段な差があつたでありませうけれども、若しも彼が我に十数倍もある陸軍を全部持つて来る事が出来たならば到底戦は出来なかつたらうと思ふのであります。これと同様でありまして、亞米利加は日本と競争をして澤山の艦を造る富は有つて居ります。しかしながら太平洋を越えて東洋方面まで持つて来る兵力には自ら限度がありました、さう澤山のものを持つて来ることは出来るものではありません、吾々は其の點を大いに考へて置く必要がある。

しかしながら今日のやうな華盛頓條約、倫敦條約に於て縛られて居るものであつては困るので、これは特色と

ないといつたら試合は出来るものではありません。今日の比率では各方面に於て日本が劣つて居るのでありますから手の出しやうがない、然るに條約の拘束から離れて自分が勝手に艦を造ることが出来るやうになつたならば地形に應じ、國民性に應じ、環境に應じて最も適當したるものを經濟的に造ることが出来る。さういふやうになれば、無駄のない最も有効な海軍が出来るのであります、これに依つてさう大きなものを造る必要がない。彼はどんな大きなものを造つてもこちらは少しも驚かないこちらが少しも驚かなければ、彼は幾ら造つても仕様がな建艦競争には出ないだらうと私は思ふ、出たところで恐るゝに足りないものでありますから構はない。それで私は條約の廢棄は決して國民負擔の増加にはならないと思ひますけれども、假に少しグライになると致しましたところで、是亦恐るゝに足りない。日露戦争の當時に於ける日本の建艦術といふものは非常に幼稚であつて、殆ど軍艦は全部外國で造つたのであります。其の金は皆外國に落ちたのであります。ところが今日は殆ど全部内地で造るのであります、外國に落ちる金は僅に百分の四か五、多くても六グライしかありません、海軍が使つた金は日本の内地に落ちるのであります。日本にも相當失業者がありますが、さういふ者を潤し、循環して景氣を好

いふものがない、解り易い歴史の例を取つて見るならば日清戦争や日露戦争に於ても、日本の軍隊は必ずしも支那、露西亞の軍隊よりも優勢であるとは言へないのであります。しかしながら特色があつた、こちらは戦が上手で自分の特色を利用して機先を制して、手も足も出ないやうに叩きつけて、さうしてこちらに數倍したるものを打破る事が出来たのであります。即ちよく研究されたるところの軍備に於ては特色といふものが非常に大事である、然るに今日の華盛頓條約、倫敦條約に於て縛られた兵力は少しも特色がない。主力艦に例を取つて見るならば、亞米利加の主力艦も日本のそれも標準型と言へば三萬五千噸、大砲は十六吋、速力は二十二、三ノット、少しも特色がありません、而も其の數に於て十に對して六しかない、其の通り劣勢である。それから補助艦に就て申すならば、補助艦を代表するところの標準型は一萬噸巡洋艦、大砲は八吋、速力は三十三、四ノット、殆ど同じであります。さうして數に於て向ふが非常に優勢である、これでは手も足も出るものではない。よく私は柔道の例を引くのであります、柔道の試合をするのに、相手の者は寝技では非常に強いけれども、立技ではこつちが強いのだといふ自信があれば試合が出来る、これに反して向ふは寝技は強いし、立技になつてもこつちは敵は

くする、即ち今日軍需工業が盛に行はれて居る爲に、景氣を煽つて居るといふやうな譯で、少しグライ軍備の爲に金を費すといふ事は恐るゝに足らない。こんな事を以て軍費が多くなるから困る、それで劣勢に甘んじて彼等の欲する所に従つて條約を結んで、其の結果國を危くするやうな事があつては絶対にならない譯であります。

吾々の先輩は、外國と交際を開いてから不平等條約を結んで非常に憤慨して、三十何年に亘つてそれこそ非常な努力を拂つて、此の不平等條約を撤廢したのであります。然るに華盛頓、倫敦の兩條約に於て、吾々は軍備上に於ける不平等條約を突付けられ、それに呻吟して國防上非常な不安を感じて居るのであります。若し吾々が今日の機會に於て、此の條約を改正して、軍備の本當の平等權といふものを確立しなかつたならば、國の將來は危くなり、さうして吾々の先輩、祖先に對して申譯がないといふ結果に陥ると思ふのであります。チヨウド千九百三十五年、三十六年といふ、所謂非常時の其の新年を迎へまして、斯ういふ點を私共は深く考へて居らなければならぬと思ふのであります。あなた方は大概御承知の事と思ひますけれども、どうか廣く多くの人々に斯ういふ意味がよく解るやうに御吹聴をお願いしたいと思います。(拍手)

皇道と法華經

海軍少將 岩野直英

皆さんお目出たうございます。皆さんは昨年中それ／＼工業に商業に廣く御奮闘になりまして、今年は又新たな力を以て、法華經的に國の爲に御盡力になるといふことは、洵にお目出たいことであります。私は隱居の身でありまして——隱居といふと如何にも老人のやうですけれどもまだ六十五です、諸君のやうな實際に働くといふことは出来ないけれども、隱居は隱居らしい勉強をして居ります。私は餘り若いと言はれるのが気に入らないので、此の頃チョット鬚髯を生やして見た(笑)今日是非常に我意を得たのは、梶木さんが私の顔を見て、「どうも岩野さんは十グライ年が老けてしまった」と言はれた(笑)兎に角隱居は隱居らしい事をしようと思つて心掛けて居りますが、一昨年は、今年は軍人勸諭の講義をしよう、何處の講演を頼まれても、軍人勸諭の一部分、又は全部の講義をしようといふつもりでやつて見ました私は軍人ですから軍人勸諭の事は一通り解つて居ります

が、やはり講義をするといふことになるに非常に自分の修養になりました、日本の神代からの歴史をズツと調べて、成程明治天皇様が淺ましき事であつたと仰しやつた譯も解り、これはさういふことのないやうにといふ深い思召も割合に解つたやうな気がして有難かつたのです。それから昨年は會館の新年會でも申上げましたけれども今年は一ツ法華經の講義をしようと思つてズツとやつて見た、無論素人ですが、素人といふものはよく考へるもので、博學でない代りに一生懸命に考へますから、これもやはり幾らか利益する所があつたやうであります。自分が勉強するのみならず人にもお話をしてそれが有益であるといふ、これが所謂功德といふものでせう。そんな風に隱居もなか／＼偉いもので、法華經なら法華經を三百六十五日、毎日に坐つたらそれより外に考へることはない、ナンにも外の事を考へないでそればかりやつて居る暇がある、だから割合に骨が折れないで體も丈夫で

今年も亦皆さんにお目にかゝることが出来た譯であります。(拍手)

今年は何をしようかと思ひまして、「皇道と法華經」といふ問題を今年は一ツ考へて見たいと思つて居る、さうするとこれがチョウド教育勸諭と法華經と一緒に考へることになる、皇道は勿論教育勸諭を奉戴するのでありますけれども、それを成べく深い意味に於て考へて見たいと思つて居ります。

去年の正月は、チョウド皇太子殿下御誕生の直後でありまして、會館でも皇太子殿下の御誕生でお目出たいといふ話が皆さんからありました。それと共に國の前途といふ事に就ては實に國難であつて、今大いに決心しなければならぬといふ事でありました。其の時に私は、國難と言つても國難なんぞは當然だ、それは試験だ、何時でも来るのだ、だからお互が正しく強く確つかりやつたら驚くことはない、斯ういふことを申しました。ところが今年も去年よりは何か日本の國は非常に具合が良くなくて、皆が有頂天になつて居るやうな風がある。しかし私の豫感では、去年は心配はないと思ひましたけれども今年は何だか去年よりは心配なやうな気がするのであります。それはどういふ譯かといふと、其の譯は判らないけれども、正しい日本ではあるけれども、大國の調子がよく

なつて頂上に達して来た、頂上に達するとやられるものです。獨逸がさうであつた、日本でも何かモウ一步進んで國が大きく發達するのは、モウ少しひどい試験が来るのではないかと思ひます。それに就ては、私は私で信仰をして居れば宜いのですが、皆さんも努力するに就ては本當に力一ぱい諸君の信仰に於て、佛様の全力を皆さんの體に受取つて、それを發揮するやうになさなければならぬと思ひます。

先刻お勤行の時にもあつたやうに「我等此の五字を支持すれば自然に彼の因果の功德を譲り與へたまふ」これは日蓮聖人が實に偉いことを言はれたもので、妙法蓮華經といふ五字を受持して行くならば、ひとりでに所謂祈らずとも佛様の力といふものが皆汝の身に及ぶ、其の力を以て大いに努力せよといふことであります。佛様の力を小出しにして、「助け給へ」とか何とかが言つて祈るやうなことは法華經を通じて何處にもありません、佛様の功德をすつかり貰つてしまふ、それは自然に貰ふのです。妙法蓮華經を受持して行くといふことであれば、佛様の功德といふものは全部ひとりで吾々は受けることが出来る、其の力を以て國に盡さうではないか、斯う思ひます。

唯小さな事を祈るといふことの間違つて居ることは、

日本の歴史で明に解つて居るのでありまして、佛教が日本に入つてから以來、先づ聖徳太子は立派な佛教の精神を學べた偉いお方でありますからさういふ事はないけれども、弘法大師の時代になつて、宮中に於ても祈りといふものが盛に行はれた。一時宮中には坊さんが八十人百人と集つてワー／＼お經を讀んだ、まるで宮中がお寺みたになつた時代がある。さうして一方では國が亂れて、地方では武家の強い者が勢力を得てしまつた。さういふことを明治天皇が洩ましき事であつたと仰せられたのであります。

明治天皇になりまして、其の祈禱精神といふものはスツカリなくなつてしまつた。佛教にはさういふ祈禱といふものがあり、神道もやはり同じ事で、佛様の力、神様の力を小出しにして、自分の都合の好い祈りをするといふことが非常に悪かつたのであります。それが悪いから明治天皇になつてから排斥せられてしまつた。併し明治天皇は吾々から拜見すれば實に徹底した法華經型の信仰をお有ちになつて居ると思ふ。それはどういふことかといふと、今の因果の功徳をすべて身に受けられて居る、『祖宗の威烈を受け』といふことを常に仰せられて居ります。さうして斷じてこれを行ふ、『貴朕が身に在り』

明治天皇はさういふ態度で居らつしやる。皇祖皇宗の威烈といふものは皆自分が受けて居る、だから何もお頼みすることはない、自分が自分の責任でやる、皇祖皇宗の威烈はすべて自分が受續いで居るのだから、自分が此の力を以てやるのだといふ御決心であります。チヨウド申せば『五字を受持すれば自然に因果の功徳を譲り與へ給ふ』で、吾々が法華經を信じて居れば佛様の力は皆受けることが出来るのである、決してこま／＼したお祈りなどをすることは無い、斷じて妙法五字を受持さへして行けば因果の功徳を受けて、どんなにでも國に盡すところの働きが出て来るものであると思ひます。

そこで其の因果の功徳といふものは何であるか、これは今申した皇道と法華經といふことを私は頭腦に置いて申すのであります。祖宗の威烈と申しますれば、皇祖皇宗がズツト行つてお出でになつたと其の功徳が功徳となつて、力となつて現在の天皇様迄來て居るといふことです。佛様の方で因果の功徳といふのはどういふことかと言へば、久遠以來佛様が修習なさつたところの難得の法、久遠以來佛様が實行なさつたところの大慈大悲の行ひ、或説己身或説他身、或示己事或示他事といふ働きをなさつて功徳を積んだ、其のお蔭でだん／＼人間が獸類と違つた人間らしいものに發達して來て居る、歴

史を重ねて此處までになつて來たところの吾々は、皆佛様のお蔭である。吾々が人間らしい生活が出来るやうになつたのは皆佛の恩である。さういふ大きな成績があるそれに對してそこまですて下さつたに對して、吾々は責任がある、報恩をしなければならぬ、感謝をしなければならぬ。さうして佛様は此の功徳といふものは皆お前達にやると仰せられて居るのだから、安心して受取るべきものであつて、さういふ佛様のなさつた未間の功徳といふものが積んで吾々に下さるのである、有難くそれを頂戴して、さうしてそれをどん／＼使はなければいかぬと思ふ。それで今年は一つ『皇道と法華經』といふ問題に就て研究するに就ても、やはり佛様の力を私は頂戴して——どうぞ下さいとは私は言はない、佛様はやるのだと定つて居るから、黙つて貰つて居れば宜い（笑）決して祈るといふことはない、祈りなどをするから排佛棄釋をやられた。祈りなどは要らない、佛の力の小出しはお願ひしない、一味の雨でザ／＼と降つて來る、それを皆頂戴してしまふ。私一人で頂戴するのではない、あなた方も皆頂戴して宜い、それは分けなくても宜いので佛様の力を皆あなた方一人で頂戴しても宜い、佛様の力は無量だから幾ら頂戴しても宜い、吾々が佛様の力を皆頂戴しても少しも足りなくならない、實に佛様の力とい

ふものは不思議です。そこでどうも今年は何事かありはしませんかと思ふ、是からの困難に向つても、少しも胸をどき／＼させないで、其の覺悟でやつて行かうと思ひます。これが私の新年の所感であります。（拍手）



年頭に方りて法國冥合を念ず

貴族院議員 井 上 清 純
 男爵 爵

正月はお目出度たい話をしなければならぬのでありますが、今日の我が日本は實に容易ならぬ時であると思ふのであります。御承知の通り、我國は昨年國際聯盟を脱退し、又近く華盛頓條約の廢棄を通告してしまつたのであります。これは條約上の權利ではありませんけれども、普通の國家では到底出来ない事でありまして、日本が非常な決心を以て、さうして非常な國力がなければ、此の二つの大きな事件は出来上らなかつたのであります。何人の力でもない國の力であり、國力の然らしめたところでありまして、使臣の力ではないのであります。倫敦豫備會商などの經過を新聞紙上等でお讀みになる方は華盛頓會議の時、倫敦會議の時と比べて格段な差があることに驚かれるであらうと思ひますが、其の通りに今や世界は一大轉換をせんとして居るのであります。驚くべき日本の躍進と、驚くべき世界の縮少とが、時を同じうして今日出會つたのであります。

此の國に理想的文化を打建て、往いては日は東から西を照す如く、世界の文化を照す爲に吾々民族は何千年間正義を養ひ來つたものであります。其の正義が外に伸びることなく今日まで來つたのであります。然るに時なるかな明治御一新が回轉されまして、纏て其の餘澤は今や大陸に我國が足場を得る事が出来まして、これから東西南北に向つて皇道を世界に布くといふ皆歸妙法の曙光が見え初めたのであります。其の爲の此の躍進でありまして、其の躍進の爲に現はれる所の事柄が今日の非常時となつて居るのであります。見様に依つては決して悲觀すべきものではないのでありますけれども、今申したやうに、國際聯盟を離脱し、華盛頓條約廢棄通告をした我國は、更に來る三月二十七日には、國際聯盟離脱の有効期限に達するのであります。此の時は恐らくは歐洲列強は、辯を並べて大きな決議をするのではないかといふ兆も見え初めて居るのであります。

御承知の通り倫敦に於ける軍縮豫備會商は、去る十二月十九日を以て終つたのでありますけれども、何等決定するところなくして問題は將來に残されたのであります。今年には本會議が開かれて新たな軍縮會議が行はれると思ひますが、しかし此の軍縮本會議は毫も成功する目當はないやうであります。豫備會商が不成功に終つたな

吾々の國を熟々考へまするのに、歴史的に於ては洵に遠い久遠の昔であります。國を聚むること宏遠に徳を樹つること深厚なる國であります。此の國が北緯五十度四十六分から、同じく北緯二十一度五十分に亘り、二千哩の南北に蜿蜒と横はつて居る此の國は、西の方に世界の寶庫であるところの亞細亞大陸を抱いて居るのであります。東の方には世界第一の大きな海洋、太平洋を控へて居るのであります。而も温帯の地に大部分は屬して居りますが、手は北海に届いて居るのであります。又南の方は南洋群島から赤道を扼して居るのであります。此の大なる姿は、これこそ三千年或はモツと大昔から特殊の國體を擁護し、内に人心の結合を鞏固にし、外には四方の文化を吸收し、其の精髓を蓄積したところの主體でなければならぬのであります。此の國が聖國の精神は、常に大八洲に住んで居るところの吾々大和民族だけが、享樂を樂しむ爲に作り上げた國では斷じてないのであります。

らば、到底本會議に於ても満足なる條約を結ぶことは出来兼ねると見なければならぬのであります。然らば無條約になるのであります。此の無條約といふ事は英米が齊しく嫌ふところでありまして、何とかして條約を結ばなければならぬといふ工作を施すでありませうけれども、奈何せん、兩者の意見が對立して居つて、到底圓滿には結ばれないと考へるのが至當であらうと思ひます。旁々來年から再來年に掛けては我國に對して、經濟的にも、又政治的にも、或は思想的にも、いろ／＼の難問題が續出すると覺悟しなければならぬのに、我が國民の有様を見るのに、口には非常時を唱へながら少しも緊張するところなくして、何か恃むところがあると見えて、毎日々々浮つて居る有様は、諸君は何と御覽になりますか。

私は昨年滿洲を一巡する事が出来ました。又内地も方々廻りましたが、到る處に於て熱烈なる愛國の聲は聞きました。殊に農村の青年達は、自らの困難を物ともせずして國を愛する叫びの聲を擧げて居ります。到る處に日本に歸れ、日本の歴史に振返れ、日本の使命に甦れといふ聲が津々浦々に満ちて居るのを見たのであります。惜むべし、其の中に國を愛する人は法を知る所以を知らない、又宗教家は國を愛するところの熱が出て來ない。

これは世界に亘つて居るところの救きであります。我
 國に於てもこれを救きと見なければならぬのであります
 殊に近年に於ては、日蓮聖人の御遺文に對しても兎角の
 批判を與へる者があり、又聖德太子の御事績に對しても
 甚だ無禮な、無自覺の言論を弄する者があるのでありま
 す。斯様な考を以て到底國家の改造は出來ないのであり
 ます。

私は今や我が國民の忌憚なき意見を披瀝するならば、
 此の現状に於て憚らずと考へて居る人々が、改革を希望
 して居るのであります。而も一方に於ては急進的の改革
 を叫び、他面に於ては漸進的の改革を叫んで居りますが
 同じく改革といふことを必要として居るやうであります
 外に國難を平げると共に、内の頽勢を正さなければなら
 ぬと考へて居るやうであります。チヨウド日蓮聖人が出
 られた時と同じやうであります。聖人は嘗に宗教を改革
 されたお方とは思ひません、政治の根柢に於て改革を叫
 ばれました、社會組織に於て改革を叫ばれたのでありま
 す。今日に於て、吾々は、先刻上田理事長から經濟的の
 問題に就て淳々とお話がありました。日蓮教徒の中に
 於ても、亦齊しく經濟方面に於て改革しなければならぬ
 といふ聲を擧げて居り、又實行手段に懸へんといふ事
 することも知つて居るのであります。如何にして此の政治

のものを吾々の手に於て完成せしむることが出来るかといふ事が大きな問題であります。

今日はいら／＼當面の問題も起つて居りますが、將來
 の海軍建艦競争、これ等も熟々考へて見るのに、米國民
 と大和民族との力の問題であります。經濟の競争ではな
 くして技術の問題となるのであります。畢竟は、我國が
 有つて居るところの精銳なる艦隊は、大和民族が作り上
 げたと言はなければならぬ。つまり軍縮問題も究極は思
 想の問題であります。經濟問題も思想問題なのでありま
 す。政治の問題も畢竟精神の問題となるのであります。
 聖德太子は何と仰せになつたか、『政治の本は學問にあ
 り』と仰せになつて居ります。學問とは何ぞや、今日の
 やうな學問を指して言ふのではなくして、身を修める
 學を學問と言はれたのでありますから、畢竟心の問題と
 なるのであります。我國の改革に任ぜんとする者は、總
 ての問題が心の問題であるといふことによく氣を付けな
 ければならぬのであります。チヨウド大和の法隆寺の修
 繕をするやうなものであります。我國は一つの崇高な
 る藝術品であります。此の藝術品を無暗に修理を施した
 ならば根本から壞れてしまふのであります。法隆寺の修
 築に當る人が、慎重なる態度を以て歴史を調べて修繕を
 しつゝあるあの態度に依つて、日本の國家も亦革新をし

組織、或は經濟機構、社會制度などを改革する事が出來
 るか、これは大きな問題であります。

我國の文明は最も古くから日々にこれ新たなるもので
 ありまして、古に復らなければ新たなる文化を創造する
 事が出來ない國でありますから、餘程慎重なる態度を有
 たなければ此の難事業は完成する事が出來ません。大化
 の改新の時には前後百二十年も掛つて居ります。上天皇
 様から、下國民に至るまで一團となつてやつた仕事です
 らも百二十年の歳月を費して居るのであります。而も其
 の當時は經濟機構に觸れた爲に、國力衰頽を來したやう
 な憂もありません。其の結果、大陸から我國は手を引か
 なければならぬ事になり、白村江の沖の唐軍の爲に我が艦
 隊が全滅した、其の敗陣を以て天智天皇は非常な憂を懷
 かれて鴻業の半ばを終られたのであります。

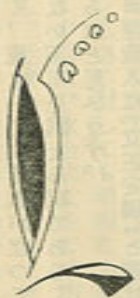
明治維新は同じ精神に依つて回轉されたのであります
 が、惜むべし、恰も佛敎衰頽の時代でありまして、儒敎
 に對しても正確なる見解は立つて居らなかつた時代であ
 ります。惟神の思想に對しても明確なる知識を有たなかつた
 時でありまして、政治的に於ては稍改革の實を現
 はしたけれども、社會全般の方面に於ては幾多の改革を
 後に殘されて居つた、未完成のものであつたといふ事に
 氣が付かなければならぬのであります。今日まで未完成
 なければならぬであらうと思ひます。此の教養を有ち、
 深き思索の下に於てのみ我國は革新されるのであつて、
 到底武力を以て、或は一二の英雄が立つて此の國をどう
 する事も出來ない不可思議なる國であることを、よく考
 へなければならぬと思ひます。

即ちこれを日蓮聖人は『立正安國』と言はれて居るので
 ありまして、立正とは申す迄もなく正しき道徳、正しき
 宗教、正しき哲學、此の三つのものが人類の基礎となら
 なければならぬ。即ち心の問題であります。心を正す
 事に於て始めて家を維持し、社會の改革が行はれ、國家
 の革新が出来るのであります。若しも此の事を疑ふなら
 ば、地積が廣くあつて、物資豊積なる所に活動力旺盛なる
 ところの國民があつたならば、直に隆々たる國家を得ら
 れると言はなければなりません、それは即ち亞米利加合
 衆國であります。亞米利加合衆國は其の勢を以て一時は
 繁榮を來したのでありますけれども、千九百二十九年を
 名残りとして、今や急轉直下しつゝあるものであります。
 それはどういふ譯かといふと、道徳は廢頽し、宗教の信
 仰はなくなり、哲學の基礎がないからであります。此の三
 つの問題に就て大なる缺陷を有つた亞米利加合衆國は、
 今や昨年の赤字公債が、中央政府だけでも三十五億萬弗
 今年の赤字公債が五十二億萬弗といふ驚くべき數字に上

つて居るのであります。其の失業者は千二百萬人、世界の失業者が三千萬人と言はれて居りますが、其の三分の一を亞米利加合衆國は有つて居るのであります。殊に吾々として注意しなければならぬ事は、農村の疲弊は到底日本などで想像することの出来ない、一毛の草も生えない所が澤山あるのであります。而もこれを加奈陀と比較したならば非常に明確に解るのであります。加奈陀と亞米利加合衆國とは地積が續いて居つて、何處に境があるか判らぬやうな所であるに拘らず、足一たび加奈陀に入つたならば、農村は繁榮して居る。それは何であるか王の國の民と、共和政體の國の民との違ひであります。此の事は佛教の教主である釋尊がチャント言つて居られます、王なき國の民は自ら以て王たりとす、即ち増上慢となつてしまつて居るのであります、少しも止まるところを知らない民は急轉直下するのであります。經濟問題と雖も決して物質問題ではないのであります、悉く人の心から出て来る問題でありますから、これを日蓮聖人は「立正安國」と仰せになつたのであります。今日吾々はどうしても此の國家社會全般に於て、十分改めなければならぬ澤山の垢を有つて居るのであります、此の垢を清算することなくして、どうして内外の國難を打開する事が出来ませうか。

然るに國は其の方向に向つて進みつゝあるにも拘はらず、人がこれを知らないのであります。人が本當に日本人に歸つて居らないのであります。國は折角日本固有の相に歸らんとして居る、其の證據は、世界の眞中に大躍進をしつゝあるのを見て首肯されることであらうと思ひます、然るに大事な人がそれに副はないのである、此のクライカはしい事はありません。今日陸海軍の軍人は、國を思ふことに於ては人一倍でありますけれども、惜むべし彼等の多くに宗教を有たない、哲學を有たないのであります。若し一步誤つたならば大變な事になるかも知れません、此の時に日蓮教徒は、法を知り國を思ふといふ旗印の下に、敢然として起上らなければならぬ時であらうと思ひます。

私に昭和十年の初頭に於て、自分の所懐を述べて聊か諸君の御健闘を祈る次第であります。(拍手)



天理教と問答對詰の顛末記

長胤寺住職 梶 木 顯 正 述

昭和九年十二月三日

千葉縣拾見川畑神場

天理教習志野宣教所宛

慕張町長作日蓮宗

長胤寺御住職殿

(表) 本郵便物ハ昭和九年十二月三日第

四五四號寄附内容證明郵便トシテ差出シ

タルコトヲ證明ス

千葉縣習志野郵便局 宛

東北の飢饉と云ひ全國的風水旱害と云ひ、近來打續く社會の不況と云ひ、爾安すと云ひ國家は方に國際的危機を控へて非常時の頂點に乗り上げてゐる。心ある人々は如何にしてこの難局を切り抜けんかを日夜苦慮して居る時、時、昭和第九も今や終らんとする師走の四日午後の一時半頃、慕張町長作、長胤寺住職殿と書れた内容證明の配達證明付き書留の嚴めしい封書が配達されて来た、私は近來かうした郵便を受け取らねばならぬ事情を持つて居なかつたから一寸意外に感じた、一體これの出し主は誰れだらう!と裏を返へしと見ると「拾見川畑畑習志野天理教宣教所」として責任印が押してある、其時私の頭へピンと感じたものがある、それは去る八月廿七日の夜拾見川畑畑と云ふ所て非常時に對する國民覺醒の意味で「國民思想と宗教」

と題して納涼講演をやつて来た事があつた、(最も斯うした講演會は毎年八月は農家の仕事の一吋あひ間の有る時期だから近區で一週間位ひづつやつてゐたので)其時話の中で大本教と天理教に對する所信を少し述べて批判し反省を促した事を記憶して居たから、直ちに其事に關係した内容證明だナ、と云ふことを直覺した。封を切つて見ると果たせるかなその通りであつた。

(表) 告知書

時局多端ノ折柄大衆日蓮主義ノ私通ニ御奮闘ノ由敬意ヲ表シ申候 就テハ御所説中天理教ニ關シテハ就中譯妄ノ言多ク一々反駁ノ煩ニ堪エズ俟テ期日場所等御協議下サレ立合對論講演會ヲ開催仕リ是非ヲ大衆ノ判斷ニ仰ギ度ク敬意ヲ得タキ次第ニ御座候

と認められて居て右はその全文の寫であるが、私はこれを見て少からず不快を感じた、それは差出し人の署名の無い事である、封皮には差出し人の署名が無いが中の本文には署名が有るだらう、と思つてゐたのにやはり差出し人は無名である。一體始めて他人の處へ手紙をよこすのに差出し人の姓名も書かずに

「こすこととは、若し意識的にやつたとすれば甚だ都合な局面にした態度であり、無意識にやつたとすれば禮儀を知らぬ人間である」何れにしてもこんな手紙をよこす位だから度胸の無い人間でもなからうが一體何んの爲に自分の名前を書かないのだらう！これは私を高が田舎の和尙位、(或は此の手紙を受け取つたらフルイ上るだらう位)に考へて居たのかも知れない」とナメてゐるから故意に無署名にしたに違いない、だつたらこれは突き返してやらんか、とも考へてみただが然し讀んで見ると「御所説中天理教ニ關シテハ就中譯支ノ言多ク一々反駁ノ煩ニ堪エズ云々」とある、この譯支の言とは何だ、君の説くことは嘘言であるウツツバチの説であると云ふのである、この文句に注意しだした時私の宗教的良心は早承知出来なくなつて終つた。私の講演がウツツバチであると云ふ事を許して置くならば私の今後社會教化の上に立つ社會的信用は失はれて終う譯けである、私の宗教的生命が斷たれて終う譯けである、私の求道的精神の自殺である。第一佛祖に對し奉つて申譯けがない、故師匠感應院日蓮上人祖教師匠たる日生上人に何ぞ申譯けが立つか、の

みならず「乞食になつても汝は袈裟衣を脱いでばならぬぞ！」と私の道念を策勵して逝ひた實父母般院様は何と申譯けが立つか。近くは檀家信徒の諸賢に對しても私の職尊上このまゝ引込んで居る事は許されぬ、私も男であるが負けるまでも出て行かなければならぬ、私の心は暗くなつたり明るくなつたり暫くは斷じかれて居たのであるが終ひに決心した。

この非常な國民一致で當らなくてはならぬ國情を前にして、同じ精神を以て國家に働かなければならぬ秋に非常識な宗教家連である世の心ある人達から笑はれるかも知れないが、然し斯うした果たし狀をつげられて見れば(甚だ不本意ではあるが)出なければならぬ。對論することを決心した。それにしても内容證明の局が津田沼町大久保(大久保とは習志野驛隊の前に在る町で、私が常に布教をして居る處で此町には天理教の教會がある事を知つてゐたから)の習志野郵便局である事は解せない、畑の神場の教會から差出すとすれば檢見町神場と云ふのだから檢見川局から出さうなものと思はれるのに、それを大久保習志野局から出して居る所から案する

事ですから私もその對論者の中へ加へて貰ひ度い」といふことであつたから私はよからうと云ふので對論には此方からは私と村田と二人が出る事に決心した。それにしても明日は全部の段取りを協議して來なければならぬが一體天理教側は幾人出るつもりだらう。何しる八月の納涼講演を發端として十二月三日の對論申込までにはザツト四ヶ月の間があるわけだから先方としては相當準備と考を練つて居るに違ひない、が然し私としては何が出やうが何人來やうが少しも怖れる事はない、ただ宗教者として眞剣な求道の精神を第一として寧ろこの機會に彼等の誤りを正して社會教化の上にも功でも擧げ得らるれば幸である、と心稿かに考へてゐたのである。翌五日の朝飯を済して直ちに中台武兵衛氏と二人で神場へ出かけた、生憎とこの日は朝から雪が降つてゐてなかに冷めた神場迄は廿餘丁もあつたらうが中台氏には随分氣の毒であつた。行つて見ると未だ公式に宣教所とは成つてゐないのだと云ふがも早其の基礎は出來て居るらしい、主任の人を尋ねると「和泉米藏」といふ人が主人兼主任であると云ふことが知れた、で主任の方はと云ふこと私がそつたと

云ふ事であつたから私は名刺を出して來意を告げ二人は上り込んで、では昨日の内容證明は貴方が出されたのですか、と尋ねると「イエと云ふ返事である、私は妙に感じたで貴方は御存知がないのですか、といふとエ、話にしてゐたのですが、ではアレが出したかな、といふ調子だ、私にはそれが難から出されて居やうとそんな事には頓着ない只事は此の宣教所の主任である和泉米藏君が其の責任を意議してさへ居るならそれでよいのであるで私は直ちに、此の書面の發信者は貴方であるを認めますから貴方と協議をしますが、第一に此の書面の趣きは承知しましたが對論會の場所は津田沼町大久保の藥師堂にしたいと思ふが如何、日時は次の日曜日十二月九日午後一時開會で同五時閉會として如何、對論者は天理教側は幾人かと云ふと自分と小川孝一と云ふ者と二人であると云ふ、で互ひに意見を述べ合つて次のやうに日時場所對論形式等を協定した。

- 協定書
- 一、會場 津田沼町大久保藥師堂
 - 二、日時 十二月九日午後一時開會
 - 三、當日ノ對論者
- 日蓮宗側
- 長作長風寺住職 梶木顯正
 - 村田顯明
- 天理教側
- 神場天理教習志野宣教所主任 和泉米藏
 - 法學士 小川孝一
 - 辯護士 宣教師
- 一、當日對論者以外ハ一般聽衆ト共ニ天理教會側及長風寺側關係者(若シ當日其席上ニ出席スル共)ハ絕對ニ發言權音ヲ發スル事ヲ嚴禁スルコトヲ相方協議ノ上決定ス
- 一、當日警察官ノ立會テ乞フ事
- 以上ノ協定ヲ概ク守ル事
- 昭和九年十二月五日
- 日蓮宗長風寺住職 梶木顯正
天理教習志野宣教所主任 和泉米藏

以上の如く決定したのであるが、たゞ會場の問題だけ、未交渉であるから保留として置く事にして寺へ歸つたのは正午十二時頃であつた。翌六日朝私は早速大久保へ出かけて藥師堂の都合を聞く、「九日は別に支障なし」と云ふ事であつたから九日の午後一時から候

用する事の承諾を得て直ちに神場の和泉君へ
 会場決定の旨をハガキ投函、次で軍に知らせ
 る意味で教區の幹事布教師たる章切信榮師宗
 門の總監たる木村日保上人友人の和賀師及び
 團の磯部氏等へ發信、其足で習志野巡査駐在
 所へ立寄り右の如く九日午後一時より開催の
 旨を述べて當日立會はる、様にお願ひして寺
 へ歸つた。それから一日間を措いて八日の朝
 再び大久保へ向けて立看板を会場前と其他
 要所へ三枚長作區内の要所へポスターを一枚
 出して當日の來るのを待つたのである。處が
 區内のポスターを見て事情を知らぬ機信徒の
 年老ひた人達は心配し出したらしい「天理教
 と問答對論」これはお上人が神場の天理教へ
 田かけて行かれたと云ふのだからキツト此方
 から天理教の方をハツツケるつもりでやるの
 に違ひない、今の内にお止めになるやう注意
 しては、と言ひ出した者もあるといふ噂さ、
 その爲に心配してわざと寺へ來て呉れる人
 達さへもあつた、が然し私としては果たし状
 を付けられた方であるから今更引込むことは
 出來ない、噂さに依ると當日は機家の青年達
 も多数聴講に出かける、との事である、チア
 私には心配になつて來た青年達が出かけるので

あつては何んな問題が當日持ち上るかも知れ
 ないこれは充分注意を與へて置く必要がある
 と考へたので、齊川光俊君（これは寺へよく
 來る機家の眞面目な青年である）に呉れ呉
 れも「行くのは幾程行つてもかまはぬが『擧力
 は無能の表示』である事を皆へ充分言ひ聞か
 せておいて貰ひ度い」と念の爲頼んで置いた
 のである。
 終ひに約束の九日は來た、天氣はスバラシ
 タ上等まるで春のやうにはか／＼と暖かだ風
 は無し全く集會にはなごやかなもつてこの
 日である。行商人の話に依ると天理教側では
 神場は勿論、益見川、喜張驛前、武石、實
 相等數十枚のポスターを張つたので到る所大
 變な評判だとの事日曜ではあるし問題が問題
 だけに集る人々も多数であらうとは大體前も
 つて考へられた。

私は村田と共に寺を出たのは十二時廿分前
 であつた、出發に望んで私は御本尊に合掌し
 つゝ一種云ひしれぬ氣持ちで自分の決心を申
 上げると共に、必ず彼等の邪を正さなければ
 やまぬと心中念じて大久保へ足を進んだの
 である。一足先きに會場へ着いた私達は演壇
 に近い所へ火鉢を前に坐をゝめて居ると、同

もなく天理教側の和泉米藏君が黒の五ツ紋の
 羽織に袴もいかめしく年の頃卅五六とも思は
 れる洋服の紳士に書生のやうな男を一人連れ
 て這入つて來た、聽衆も三三五五と集まつて
 來る和泉君は私の坐つて居る前の火鉢の向ふ
 側へ坐つて私等に目禮したがその傍に坐つた
 洋服の紳士と書生は傲然たる態度で嘯きなが
 らタバコをふかして挨拶をしやうとしな
 いで私は小川と云ふ人であらうとは想つたが和
 泉君に向つて、小川さん云ふ方は何方です
 かと尋ねると、今の紳士を指して此人が小川
 孝一と云ふ人ですといふ、そこで小川君は不
 精無精名乗つたから袈裟を掛けて居るから見
 て取つたがらうと思つたが私も自分を紹介し
 た。小川君としたら心中「なんのこんな田舎
 和尚が、今に一たまりもなくやつとつけてやる
 ぞ」とても考へて居たのだらう。

イキナリ彼れは口を切つて「今日の時間の割
 振りは何んな風にしますか、私の方でやる時
 間が無い程やられては堪りませんからね」と
 語氣なが／＼に荒い、で村田が「それは問題
 に依つて長くかゝる場合もありませうから前
 もつて定める事は困難だと思ひますが」と云
 へば彼れは「それは随分無責任だ、そんな馬

鹿な話があるもんか、若し感情に走つてやる
 なら僕も辯護士ですからこんな問題は法律
 行爲に依つて終ひますよ」とまるで喧嘩腰で
 ある、で私は靜かに「私の方で全部時間
 を取つて終ふやうな非常識な事はしませんか
 ー」と言ふと、彼れはやはり空論いて居る
 で村田が再び「では方法論に於て一問一答とい
 ふことにすれば時間の問題は一番公平でい
 いぢやないですか」と云へば彼れは應酬にア
 ゴでウナヅイたかと思ふと「哲學をやつた者
 でなければ方法論などと云ふ言葉は使はない
 が哲學的問題でおい出になるなら失禮なが
 ら充分お相手仕りますよ」と一段アッセン
 トを上げて挑戰的威壓と云ふか機先を制する意
 味が語氣に劍を含んでゐる。この時聽衆は四
 五十人集つてゐた、時計を見ると一時半にも
 ならんとしてゐる、私は天理教側に開會を促
 して坐を起つと共にテーブルを間にしてお互
 ひ對論者は左右へ分れて陣を取ることにした
 さうして先づ私は演壇に立つて開會を宣し此
 處に對論會を開催するに到つた事情經過を内
 容證明の告知書を読み明し、更に對論者相
 互の協定事項たる對論者以外は何人も發言を
 禁する旨を發表した、この時聽衆から質問

をも禁するかの問が出たのでそれは論旨を
 進める都合上終つた後に許すこととした）續
 いて此の會を開くに至つた根本は私の天理教
 批判が原因である、と云ふ事から起きたので
 あるから先づ會の性質上私としては改めて天
 理教を再批判するが順序だと思ひます故に都
 合上一つ問題を出して私の天理教を研究した
 結果の疑問を擧げます、と次の如く問題

- 一、天理教の神ノ神ハ造物主ニシテ字
 宙人生百數ノ絕對的主宰者也一切ノモノ
 ハ此ノ主宰神ノ攝理ノ中ニ於テ終始シ在
 ルモノ也ト云フノテアルガ、若シ然ラバ
 信ズル者モ信ゼザル者モ共ニ其ノ神ノ攝
 理ノ中ニ在ルト云フコニナルノデアアルカ
 ラ信ズル信ゼザルニカ、ワラズ神ノ惠ミ
 チ一様ニ享クベキデアアルガ何故ニ信ズル
 者ノミガ教ハレテ信ゼザル者ハ教ハレザ
 ル歟矛盾アリ如何
- と天理教側へ提出した、するに村田は起つ
 て、只今師匠の出された問題をいまい少し敷演
 したいと思ひますと云ふので代つて壇に立ち
 一體この會を開いた意味は二つ有ると思ひま
 す。

一つは何處までも求道的精神から問題を

純理に依つて批判すること

- 二つはその結果を大衆の判断に俟つこと
 でなければならぬ、其處で今師匠が出さ
 れた問題は「神と世界の關係」を言はれたも
 のであつて、若し天理教の神が此世界を造つ
 たといふならば其處には自ら二つの問題が
 起つて來るので、一つは神の世界創造は「神
 の内的必然から創造したか」と云ふ問題、二
 つは「神の意志から創造したか」と云ふ問題
 である。それが一の場合だとすると決定論と
 なつて其結果は道德の否定となり歴史の否定
 となつて來るが如何、二の場合だと云ふなら
 ば世界過程の變更は可能となるので、こんな
 住み難い世界は早く打ち壊はしてもつと住み
 やすい世界に造り代へては何うか、と云ふこと
 になるが如何と、云ふ調子で問題を哲學的に
 深く掘り下げて降壇。天理教側は首席對論者
 たる和泉君が出るのかと思つて居るとさには
 あらで東京から來た法學士で辯護士ながらも天
 理教の教師と云ふ肩書を持つ小川孝一君がハ
 チ切れさうな元氣で颯爽と登壇、この時聽
 衆席から拍手が起る、彼れは開口一番、アノ
 内容證明は私が打つたのである、それは去る
 八月如區に於て榎本御前様が國家の非常時で

あるから大いに働かれねばならぬといふので、民を集めて御講演下さつたそうで、さすがは宗教家だと心から深く敬意を表したのであります。所がそのお話の中に天理教を非常に非難されて、「これ程に言つて居るのに天理教の奴等は一匹も出て来られないのか」と云はれたのであります。(櫻木註、私は新様なことはあの節云ひはしないが)其處で私は天理教徒でありますが後で話を聞いて誠に遺憾に思ひましたので、丁度蕨谷が只だ一騎今しも行かんとする教盛に返せ〜と呼んで呼び止めたが如く此處に出て来た譯けであります、今村田上人から哲學的な小六つかしい問題のお話がありました。が斯やうな面倒な小六つかしい話なら私と村田師と二人でやればよいので、聽衆諸君はこんな面倒な話を聞かうとして居られるのではない、そこで立場が違ふと同じ一つの土瓶(この時彼はテールの上の土瓶をブラ下げて聽衆に示しつゝ)の口でも私の方から見るに左に付いて居ると云ふことになり、諸君の方から見ると右に付いて居ると云ふことになりといふやうなことを云ひ近代の有名な或る哲學者は云つてゐる、現代の哲學はマルクスが言ふ如き唯物論と今一

つは唯心論である。吾が天理教もある意味では唯心論の中へ這入るものであります。多くの人はこんな小六つかしい面倒な理窟から宗教へ来て居るのではなくして、彼の日蓮大聖人のあの龍ノ口に於ける意氣と熱のある南無妙法蓮華經のアー太鼓の音、天理教の御神樂歌の音につれて信仰に這入つて来て居るのであります。と云つた話で終つた。そこで村田は再び壇に立つて、辯士は只今立巻〜と云つて居られましたが辯士御自身御自分の立場を御存知ないのではありますまいか、お互ひに宗教者として天理教は天理教の宗教的立場、日蓮宗は日蓮宗としての宗教的立場といふものを持つて居る譯けであります。只今土瓶をブラ下げて其の口が右に付いて居るとか左に付いて居るとか小六つかしい話がありました。がそんな話は小供だましの様な話であります。(と云へば聽衆一同笑ふ)只今辯士は近代の哲學は唯物論と唯心論の二つであると言はれましたが其處には誤謬があります。

近代哲學は唯物論、唯心論更に經驗論、理性論といふやうに考へられて居るのでありますからそれは誤りであり、と彼れの誤謬を訂正しつゝ、更により深く宗教哲學の立場から論々として水の流れるが如く、益々冷靜に益々鋭く敵の急所を突いて天理教の教祖は何しやいます。「この大神様は元々無い人間、無い世界をこしらへた神である」と又「この世をはじめた神のことなれば、せかい一れつ、みな我子なり」と、神は眞でなくてはならぬ美でなくてはならぬ善でなくてはならぬ、その眞であり善であり美であるべき神が造られたこの世界の現實の有様は何うでせう、寧ろその反對に餘りにも醜であり惡であり偽であるでは有りませんか、せいよ〜その論調は鮮てゆく、聽衆は餘りにも落着いた村田の態度と理路整然たる論調にスツカリ感服して中には「もう勝負は知つた〜」と云ふ者があるかと思ふ。さうして段が違ふ〜など云つて居る聲も聞へる。次で再び壇に立つた天理教の小川君は、イヤ何うも有難いことですが、年をして若い人から教へられて、私も學校を出てもう四年計りになりましたが元來頭が悪く生れて居りました。習つたことは皆忘れて終ひましたが如何でせう、こんな小六つかしい理窟をヒネッタテ學問的にこの問題を徹底的に解決

しやうとした所がこれは何時までやつても解決はつくものでありませんから一つ手つとり早く、聽衆諸君の中には天理教とは何んなものか、日蓮宗とは何んなものかと云ふことをお聞きになり度い方々も多數お有りのことと思ひますから、さういふ話にしては、云つたから直ちに私は「對論の相手を捨て措いて一方的にそんな話をしては困る」と小川君に抗議を申込んだ、すると同時に聽衆の中から「出されてゐる問題通り願ひます」ハネ返して来る(この時聽衆少し騒いだが)其處で彼れ小川宜教師は語を次いで、私は天理教徒でありますから天理教の立場に立つて居る、こゝだけはハツキリ申上げて置きます。天理教の神は理でありまして理なるが故に如何なる所にも御座るので、信する人の誠の心にお居るのであります。(と云ふと聽衆皆から拍手が起きる、これは天理教信者の拍手であつたらしい)今村田上人から天理教の神様は世界を造つたと云ふことが天理教の本に書いてあると云ふお話がありました。が、あれは一つの便法(方便の意味)でありまして神は前であり教祖は後に造つたものであります。例へば日蓮宗の法華經でもやはりさうであります、と

言ふ風になつては話を重ねる毎に甚だ無責任となり不誠意を暴露しつゝあつたから、私は此處で終ひに憤慨談を一席辯じ、次で直ちに村田が立つて、天理教は神の宇宙創造を承認し神は理であると言はれるが然らば理とは宇宙の法則といふ意味だと思ふが、非存在の存在即ち法則といふことであつては、非存在の存在の汎神論であつて天理教は佛敎に降伏したものである。のみならず宗教論學の上から「神は法則である」と云ふ事になると人格性が薄くなつて来て居ることは明瞭で、然らば如何にして此の汎神教的な人格性を持たぬ理に絶對的主宰神といふが如き人格性を付與するのか。天理教では親神様と云つて宇宙創造の人格的主宰神を説いて居るではないか。それから神が世界を造つたと云ふ思想は一つの方便である。と云はれたがそれは教祖のお言葉として教典の何處に出て居るのか、その證據を出して貰いたいお互ひ吾等教徒は教祖絕對主義の立場に立つて居られねばならぬ者が若し教祖の言葉でなくして自己の勝手な判断から批判主義の立場に立つて左様なことを云はれたとすれば、それは早天理教の外に出たものであり、第一教祖を冒瀆する者であつて教

祖に背く者であるが故に天理教徒では無くなるが如何、と舌鋒鋭い。其處で彼れ小川宜教師は「早答ふる事が出来ぬ」にも係らず聽衆中の多數天理信者の手前(櫻木註、私は已に小川宜教師は何等の道念なき人間であつて彼れの意中はずいずいとの喧嘩の爲の喧嘩をするより外の何ものでもないことを先刻より充分感知したからよ)加減の所で止を刺してやらんかとも考へたが然し武士の情と云ふこともあると思つて我慢して居ると、又々登壇、愚にもつかぬことを繰り返すのみならず、更にこんな小六つかしい議論では學術的にこの問題を研究せんとするなら天理教には教祖と云ふ學校が有るのであるから其處へ這入つて勉強されるがよいと思ひますといふ。この一言は私の感情を激發させて了つた私は極度の興奮に聲も出ない位になつた。が然し考へて分ると一面餘りにも彼れが無道念であることが悲しかつた。私は堪へ切れなくなつて壇に立つた、先き程から小川君は色々話されたが私が出した問題に對しては何等誠意ある答を與へて呉れてゐない、故に私の天理教を研究した結果から得て居る「天理教とは在ざるもの」に有るかの如き理窟を捏ねつけて世を惑はし

人を恋はず教である」と云ふ結論は未だ微動だもしてゐない、私を此處まで引張り出して置いて何たる無誠意か、少しも小川君達の上には宗教的良心の誠意を認めることは出来な小川君、和泉君達は信仰をオモチャにして居るのである理論をもて進んで居るのである飯の爲にやつて居るのか、何たるモシイ心を持つた人々であらうか。私は彼等に馬鹿にされたのである、住職を馬鹿にしたと云ふ事は百數十軒の檀家信徒を馬鹿にしたのであるのみならず來會者一同を馬鹿にしたのだ。如斯無意義な會はも早これ以上續ける必要はない、村田、これで解散にするぞ。と云へば聽衆一同は天理教側へ罵聲を浴せ出して場の内外は騒然として殺氣さへもなびて來た、和泉小川の天理教側は私の出した問題に對しては結構一言も答へられなかつたのである、それなのに猶私に向つて解散は合議の上にして貰ひ度いと云ふ。然しいつかな私の憤激した心は承知しない「斷じて私は無意義と認めますからこれで解散にします」と言ひ放つと流石の彼等も今は一言も無い、この時聽衆の中から「先き程の内容證明を遅れて來た人は御承知がないのでありますからもう一度讀ん

で下さい」と言ふ、一同賛成の拍手、で私は再び天理教から打つけられた内容證明の告知書を読み上げて、これが終るや直ちに「これを以つて解散にいたします」と開會を宣した其時天理教對論者席を見ると和泉君小川君の二人は未だ坐席に在つたから、私は彼等の側へかけ寄つて二人の手を握り「小川君和泉君！君達は一體何うしたんだ。もつとしっかりせんかッ！」と云つた時、多數の聽衆は驚いて私の後へどつと寄つて來て、先生今日はこれで歸つて下さい、と口々に云ふ者私の手を取る者、又檀家信徒の方々は非常心配して一所に歸りませうと私をせき立てる、で私はせき立てられて何時の間にか外へ出て終つてゐた。其時場の内外では「習志野天理教なんてなんだ、習志野の文字を取れッ」といふ者があるかと思ふと「天理教を埋めて終へッ」といふ亂暴な者もあつた。天理教の人は後で何うしたか、私はひそかにそれを心配しつゝ、村田や檀家の人々と寺へ歸つたのは夕方の四時でいもあつたらうか。今日の聽衆は四百五六十名も居たといふ。

た事を深くお詫びいたします。特に大木先生から非常に御心配を頂いた事、更にわざわざ夜一升旗をさげて慰勞に來て下さつた事は心から感謝いたします。なほ新田の秋山善次郎君が「天理教の問題は私がお上人に本を差上げたからで、此度の問題は私にも一分の責任がある」とまで前夜は一晚寝られなかつたが今日の結果は誠に嬉しかった、と勞れた身體を夜わざと來て下さつた事は呉れんも感謝に堪えない。私は今にして思ふのだがこれが夜の開會であつたら必ず大問題が持ち上つて居たに違ひなかつた、が佛天の加護が晝の會合にした事は返すも喜びであり幸であつた。(終り)



法華經講話 (第十四講)

文學士 小林 一郎

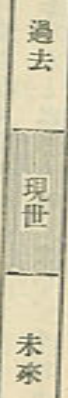
妙法蓮華經序品第一 (承前)

この前は序品に於て、文殊菩薩が彌勒菩薩の間に答へた中で、日月燈明佛が未だ佛に成られない以前に、お子様が大勢あつた、そのお子様達が、父の王が佛に成られたのを知つて、それに就いていろいろ教を受けてだんぐと修行を積んだといふ所までを讀んで居りました。今日はその續きでありまして千萬の佛の所に於て諸の善本を植ゑたり。

(已於三千萬佛所植諸善本)

といふことであります。これは佛教ばかりでなく、すべての宗教に於ては、人間の命が現世の命だけで

ない、といふことを認めて居りますから、それで斯ういふやうな思想が出來て來るのであります。わかり易く圖に描いて見ますと、



現世の命といふものは、永久の命の中の一部に過ぎないと考へる。それであるから現世に生れるといふことは、これはお互ひが斯ういふ肉體を持つて生きて居るといふことであります。この肉體を持つて生きているといふことは、これは一種の生き方であるので、決して現世で不意に生れて來るものではない

一體無い物が有るやうになるといふことは無い筈でありませぬ。無より有は生れない、有る物は有る、無い物は無い。殖えるのでもなく減るのでもない。ただその形が變るのだといふやうな考が根本になつて居る。例へて言へば、石炭を燃やして火にする、それが暫く経つと灰になつて消えてしまふやうに思ふけれども、石炭といふ黒い塊りは無くなつたけれども、その一部分は灰になつて残つて居る。その一部分は炭酸瓦斯になつて空氣に混つて存するのであつて、少しも減るものではないといふことは、今の物理學でも教へて居る。世の中に無くなる物は無い、有る物は有る、たゞその有るの形が變るだけであるといふ風に考へられるのであります。

さういふやうに考へますと、人間の命だつて、無かつたものが不意に出て來るのではない、たゞその生きたるといふ生き方にいろ／＼な生き方があるのでその生きたる方法の一つとして、今吾々はこの肉體をありませぬ。さう考へて初めて現世に於ける一切の骨折が無駄にならない。若しそれを考へなければ、死ぬ時まで一生懸命働いてその結果が無くて死んで行くことは損ぢやないかといふやうな事も考へられる。それから現世に於て善い事をして一生涯不幸で終るのはつゝあらぬぢやないかとも考へられる。併ながら永遠の命だと考へればさういふ問題は夫れ問題ではなくして、今茲で善い事をして善い報ひを得なくても、後の命に於てその結果が現れるだらうといふやうに考へられる。さういふ思想から來るのであります。現世に於て善い行を積んで佛になつたといふことは、たゞ現世だけの縁ではなくして、前の世から積み來つた善い行ひの結果が現世に現れたのだといふやうに思ふのです。

それでこの王子達が梵行を修すといつて、淨らかな行ひを積んで、さうして教を世に弘めるやうな人になつたといふことは、それは已に過去の世に於て

持つて生きて居るのだといふ風に考へられる譯であります。だから死んで行くといふことでも、さういふ風に考へればそんなに大騒ぎをやつて嘆くにも及ばない譯です。この肉體を持つて居るといふことは一つの生き方なのでありますから……。だからこの肉體が役に立つ間は斯うやつて居るけれども、これが役に立たなくなれば、この肉體を捨て、行つたつて大したことはありはしない、やはり生きるには生きたるのだといふやうに考へられる。マアそこは大分難しい問題でありまして、こんなに言つたつてすぐに解決が附く譯ではありませんが、だんだんいろ／＼なお話を申上げる間に、そんな問題に觸れることも多からうと思ひます。

さういふ風に思ひますと現世の命といふものは永い命の一部分だと考へる。さうすると現世の命よりモウ一つ前の命もあつたし、現世の命が無くなつても後の命もズット續いて行くのだ、斯う考へるのでいふのであります。

善といふことは一體どういふ事であるか。善惡といふことを普通に申しますが、善と惡とは一體何を目標にしてさめるかといふと、チヨットきめにくいのです。マア誰だつて善人、惡人といふやうなことを區別するけれども、眼の前の世の中の善惡の區別といふものは随分いゝ加減なものだとも思はれる。時代に依つて、前の時代に惡いと思つた事が後の時代に善くなる事も随分ある。前に善いと言つた事が後で惡くなる事もある。それから又國に依りますと或る國で善いとなつて居る事が他の國で惡いとなるといふやうな場合も随分あるでせう。だから眼の前の所だけ見ると、善惡の區別といふものは附かないことになる。

極く小さい例を言ふと、人の前へ行つてお辭儀を

する日本では昔から手を突いて頭を下げるといふのが禮儀となつて居る。所が西洋では頭も下げない、手も突かないで握手をする。日本の昔の時代に、いきなり人の手などを握つたら、禮儀どころではない「無禮な奴だ」と言つて武士なら斬り捨ぐらゐしたかも知れない。所が西洋では握手をするといふことになつて居る。支那では昔から揖禮と言つて、手を拱いて前へ突き出してお辭儀をする。日本でそんな事をやつたら随分變なものですけれども、それが支那の禮儀になつて居る。印度では掌を合せて合掌する。さうするとどうもこれはわからない、それが一體本當ならう。いろ／＼禮儀の方法があつて、或る國で善いといふことは他の國では馬鹿らしい事だ。まるで禮儀に背くことになると思はれるでせう。これは極めて小さい例でありますけれども、さういふ事は幾つもあります。人の所に物を持つて行くのでも、日本では「洵につまらないものですが、

差上げます」と言へば禮儀になるのですが、歐羅巴ではそんな事を言つたら無禮になる。「これはつまらない物ですが」などと言ふと「つまらない物を持つて來るとはひどい奴だ」といふことになる。だから西洋では人に物をやる時には褒めてやる。「これは大變良い品物でどうも便利で都合の好いものだから差上げます」と言ふと「ア、この人は親切な人だ良い物を呉れるのだ」といふことになる。さういふ風に風俗人情みな違ふものですから、甲の國で善いといふことが、乙の國で善くならない。であるから眼の前の風俗、人情だけで善と惡とをきめるといふことになる。善と惡との區別が立たないことになればならぬ。

さうすると、手を突いてお辭儀をするといふやうなことでも、その理由を考へて見る。何故手を突いてお辭儀をするか、何故握手をするかといふことを

考へて見ると、成程形の上に於て現れた所は違ふけれども、その根本の精神に於ては一致する所がある。昔人間が野蠻であつて、獸のやうな状態でお互に敵同士であつた時には知らない人間に會ふ時には用心をした。向ふから來る奴はヒョツとしたら自分に對して害を加へはしないかと思ふから、知らない者に會ふ時には用心をして、握り拳を拵へるとか、石を持つとか、棒を持つとか何かして會ふ。それから會つて暫く話をして居つて、これは別に自分に害を加へさうもない人間だと思ふと、石や棒を持つて居るのをやめて、手を出して見せる。「この通り石も棒も持つて居はしません。あなたに對して敵意を有らませぬ」と言つて、手を出して見せるといふことがこれが平和のしるしであります。その形がいろ／＼ある。「あなたを信じます」といふ意味で手を出して見せる。その手の出し方がいろ／＼ある。日本のやうに手を突くといふのもそれである。握手をする

のもそれである。揖禮と言つて支那人のやうにやるのもそれである。合掌もそれである。要するに「手に何も持つて居ませぬ、あなたを信じますよ」といふ形である。そこ迄行くと、形は違ふけれども精神は同じだといふことになつて來る。

善惡正邪の區別といふものはすべてその通りで、形の上に現れた所は違ふけれども、その根本を探して見ると、何處か一致する所がある譯であります。それならば何處が一致するかといふと、小さい自分に執はれて他の人間を敵にするといふことは惡であつて、小さき己れを捨て、他の人と一致しようといふのが善である。こゝは一致する。こゝ迄行けばつまり善惡といふことの區別は明かになる。己れを主にし、小さき自己を主にするのが惡だ、小さき自己を捨て、大勢と一緒にするのが善だ。斯うなる。それはいろ／＼な形があるでせうけれども、結局そこへ行けば同じになる。親孝行といふことは何だ、子

供が自分を捨て、親の善い事を圖る。忠義といふことは何だ、臣下が自分の苦しみを辭せずして主人の爲にすることである。親切といふことは何だ、友達同士自分は苦しくても人の爲に盡すといふことだ。愛國といふことは何だ、國民が自分が骨折つても國家の爲なら骨折を厭はぬといふことだ。斯ういふやうに考へて來ると、人生の道德といふものは、結局小さい自分の我儘を捨て、大勢他の者の爲に圖るといふことになつて來る。そこは一致するのであります。

そこで善の本を植ゑるといふことはそれです。總ての善の根本は何だと言へば、小さき己れを捨てるといふことです。即ち己れに執着することをやめること、それが大きな善の本であります。佛様は一切衆生の苦しみを自分の苦しみとして、これを救ふ爲に世に出て教を説かれた。一切衆生が幸になれば一緒に喜び下さつた。その佛様の心持を自分の心持とすること、それが善の本でなければならぬ。そ

る。その無量義といふのは今申したやうな意味であります。數限りの無い教、數限りの無い道といふものは、要するに心一つを正しくするといふことが根本だといふのが無量義經であります。人間のしなればならぬ事は場合に依り、事情に依り、周囲の境遇の變化に依つて違ふ。今茲でこれだけが人間のしなればならぬ事だときめて居つたつて、明日になればどう變るかわがらぬ、だから學校で習つた事などは、その儘役に立つとは思へない。例へば小學校や中學校で以て倫理道德といふものを教へて、人間としては斯ういふ事をしなければならぬといふことを教へて居る。けれどもその習つた通りの事は世の中に現れて來ない。習はなかつた事が現れて來ることもある。だから習つた事だけを守つて、それより外何もしないといふことであれば、人間として世の中に通用の出來ないことになる。けれどもその數限り無く變化する色々な道とか教とかいふものは、要

こで「已に千萬の佛の所に於て諸の善の本を植ゑた」といふ。即ち佛のお慈悲を自分の手本として、自分も小さき自己に執はれる心持を捨てようといふ心持になつて、さうして種々の修行をしたといふのであります。さういふやうな子供達がだん／＼出まして佛の教を世に弘めるやうに努力を致しました。

是の時に日月燈明佛、大乘經の無量義、教菩薩法、佛所護念と名くるを説きたまふ。

(是時日月燈明佛、說大乘經、名無量義教菩薩法、佛所護念)

是の時に日月燈明佛が、大乘經の無量義と名けるものを説かれた。「無量義」といふのは數限りの無い教、義といふのは道理とか道とかいふ意味です。その數限り無いいろ／＼な道、教といふものは要するに一つの心持から出て來るといふこと、それを説くのが無量義經であります。法華經をお釋迦様がお説きになる前に、無量義經といふものをお説きにな

するに一つの心持から出て來るのですから、心の根本を確りさして置けば、その場合々に應じて適當な道が行へ、適當な行ひが出來る譯であります。その心の根本を善くしないで、形の上に於ていろいろな事を習つたつて、それは應用の出來ない場合が随分ある譯です。その事を説いたのが無量義經であります。いろ／＼人間としてしなければならぬ事が澤山あるけれども、それは要するに心一つの立て方から出て來るのである。だからその心の根本に於て自分の私を捨て、自分の都合の好い事をやりさへすれば宜いといふやうな心持を捨てる、その大きな廣い心持が出來るといふと、その心持から有ゆる善い行ひが生れて來るといふことです。「大乘經の無量義」といふのはそれを言つて居る。

そこで「教菩薩法」さういふ教を説くのが、それが菩薩の道を教へる事である。それから「佛所護念」佛の護念する所である。佛様といふものはいつでも

さういふ心持の人がどうぞ世の中に多くなるやうに考へて、さういふ事を護つて居らつしやる。さういふ行ひの世の中に逼く弘まるやうに護つて居らつしやるのである。ですから無量義であつて、それは菩薩の道を教へるもので、佛の護つて居らつしやるところのものである。斯ういふ教をお説きになつた是の經を説き已りて即ち大家の中に於て結跏趺坐し、無量義處三昧に入りて身心動じたまはず

(説二是經一已、即於大家中、結跏趺坐、入於無量義處三昧、身心不動)

さういふ教を説き已つて、さうして大勢の人の中に於て結跏趺坐と言つて、靜かに坐りまして、さうして「無量義處三昧」今の無量義といふことを考へ、靜かにズツト行末の事を考へて居らつしやる。これは教を説くには三つの順序があるのです。説く前に考へる。どういふ事を説かうか知らん、どういふ事を話したら此處に集つて居る人の爲になるなら

う。これが本當に役に立つたらうかといふことを考へる。三昧といふのは靜かに考へること、初めに三昧に入る。それから靜かに考へて、これなら宜からうと思ひ定めた時に初めて教を説かれる。即ち説法する。それから説き已つて、今説いた事がどんな結果を生ずるであらうか、人々がこれをどれ程實行出来るだらうかと又考へる。モウ一遍三昧に入る。皆教を説くには斯ういふ順序がある。出願目にいへば又別に説くのであります。

佛が教をお説きになるにはさういふ順序がある。吾々共のやうな凡夫なら尙更さうでなければならぬのだけれども、世の中が忙しんどついでそれだけの準備をしないで、電車で駆けつけてすぐ大急ぎで喋べ

るといふやうなことをやるのでありますけれども、これは本當ぢやない。能く考へて説いて、説いたら又後で、今言つたことがどれだけ效目があるかなと又靜かに考へる。これだけの事はしなければならぬ譯です。だから茲に無量義經といふやうな教を説いて、それから無量義三昧と言つて、その事を尙靜かに考へて、この教がどんな影響を及ぼすか、どんな結果を及ぼすか、といふ所までも考へて居らつしやる。さうして「身心動じたまはず」で、身も心も動搖しないで靜かに考へてお居になつた。

是の時に天より曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼珠沙華、摩訶曼珠沙華を雨して、佛の上及び諸

の大家に散じ、普佛世界六種に震動す。
(是時天雨、曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華、而散佛上、及諸大家、普佛世界、六種震動)

曼陀羅華といふのは白い蓮の華、摩訶曼陀羅華は大きい白い華(摩訶は大きいといふ意味です)、曼殊沙華とい

ふのは紅い蓮の華、摩訶曼殊沙華といふのは大きい紅い華です。つまりさういふ華を天から雨ふらして佛様の上にも、大勢の人の上にもさういふ華が降つた。これは前にも申したのであります。天から華が降つたといふことは、天地のすべての物が感動したといふしるしであります。けれども佛様が教をお説きになるのだから、佛様の教が有難いならば、その有難いといふしるしが、佛様の上だけに現れたらそれが當然の筈です。ところがそれが佛の上ばかりでなく諸々の大家と言つて、そこに集つて居る人なやうにも思はれる、けれども、實際はさうではない。何故ならば佛様一人が佛ではない、佛の教を聞いた人は、その教をだん／＼習つて、だん／＼實行して行けば、結局佛と同じに成れるものである。だから天から華が降る時に、佛様の上にはばかりではない。教へる方の人も尊いけれども、今は凡夫であつ

ても佛に成る人も尊い。斯ういふ譯で大勢の上に華が降つたといふのである。ですから私共凡夫でありますけれども、佛様の教を修行致す者は、自分を輕んじ、自分を侮つてはいけません。自分達も結局佛と同じに成れるのだといふことを考へて、出来るだけ自分達の修行を勵まなければならぬ譯であります。それからその時に普佛世界が六種に震動した。これは前にありましたやうに、天地が動くといふことはやはり感動したしるしです。

爾の時に會中の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人、及び諸の小王、轉輪聖王等、是の諸の大衆未曾有なることを得、歡喜し合掌して一心に佛を觀たてまつる。

(爾時會中。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人、及諸小王、轉輪聖王等。是諸大衆、得未曾有。歡喜合掌。一心觀佛。)

ただ信じたゞけではいけない。たゞ有難いと思つただけではいけない。信じて尊んで頼るのです。親子の間でもさうでせう、子供と親との關係は、子供が親を信じて、親を尊いものだと思つて、親に頼る。御主人と家臣でもさうでせう、家臣が御主人を信じて、尊んで、御主人に頼る。いつでもこの三つの意味がなければ上下の區別といふものは無い。その三つの意味を籠めて、言葉では「南無」と言ふ、形に現せば「合掌」といふことになる。あなたを信じます、あなたを敬ひます、あなたに頼ります。斯ういふので合掌といふ形になるのです。

爾の時に如來眉間白毫相の光を放ちて東方萬人の佛土を照したまふに、周徧せざること靡し居つた。

その時にそこに集まつた總てのものが、前に會つて覺えないやうな非常な歡びを得た。さうして歡喜合掌して一心に佛を觀たてまつる、佛様の教といふものは非常に尊いものだといふことがわかりましたから、掌を合せて佛様をじつと見て居たといふのです。合掌するといふことは、言葉でいふと「南無」といふことになりませう。「南無妙法蓮華經」とか、「南無釋迦牟尼佛」とか、或は「南無阿彌陀佛」とか言ひます、その「南無」です。言葉でいふと「南無」それが形に現はれると「合掌」になります。「南無」といふのは梵語で、漢譯すると「歸命」といふことです。「歸命」といふことは「信する」「尊ぶ」「頼る」といふことです。佛様を信じなければ仕様がなない、佛様を尊ばなければ仕様がなない、佛様に頼るといふ心持がなければ仕様がなない。斯ういふ三つの意味がある。信する、尊ぶ、頼る。この三つの心持があつて初めて佛といふものが尊いものになります。

今見る所の是の諸の佛土の如し。彌勒當に知るべし。

(爾時如來、放眉間白毫相光、照東方萬八千佛土、靡不周徧。如今所見、是諸佛土。彌勒當知。)

その時に佛様が眉間の白毫から光を放つて、さうして東の方の萬八千の佛土を照された時に、その光がズツト満ち渡つた。さうして今お互ひが此處で見えて居ると同じであつた。諸々の佛土に一パイに擴まつた。これは過去の事であるが、今の佛様の事も同じである。彌勒よ考へて見よ、その時と今と同じだぞと言はれるのであります。

爾の時に會中に二十億の菩薩有りて法を聽かんと樂欲す。是の諸の菩薩此の光明の普く佛土を照すを見、未曾有なることを得て此の光の所爲の因縁を知らんと欲す。

(爾時會中、有二十億菩薩、樂欲聽法。是諸菩薩。見此光明、普照佛土、得未曾有。欲知此光、所爲因縁。)

その時にそこに集まつた人の中に澤山の菩薩があつて、それが法を聴くことを願つて居る、この諸の菩薩達は佛様の光が普くそこの世界を照すのを見て、この光はどういふ譯だかといふことを知らうと考へて居つた。

時に菩薩有り、名を妙光と曰ふ。八百の弟子有り。

(時有菩薩一名曰妙光。有八百弟子。)

その時に菩薩があつて、その名前を妙光と言つて居つたがその菩薩が八百の弟子を持つて居つた。

是の時に日月燈明佛 三昧より起ちて、妙光菩薩に因せて大乘經の妙法蓮華、教菩薩法、佛所護念と名くるを説きたまふ。

(是時日月燈明佛、從三昧起。因妙光菩薩。説大乘經、名妙法蓮華、教菩薩法、佛所護念。)

その時に日月燈明佛が暫くじつと考へて居られたその状態から起ち上つて、妙光菩薩に因せて、「因

ない。これは字で書いてある。けれども字といふものは本當の意味を表はすものではない、言葉だの文字だのといふものは限りがある。その限り有る言葉や文字で以て、限り無いところの眞理を表はすことは出来ない。だから言葉や文字を習つて、さうして言葉にも言へない、文字にも表はせないところのその深いものを捉へなければ何にもならない。言葉がわかつたらそれでわかつたといふものではない。字がわかつたからそれでわかつたといふものではない。それでありますから今私共の知つて居る妙法蓮華經はこれでありませうけれども、斯ういふ字で書かなくても、又別の意味でも、別の言葉でも、妙法蓮華經は説ける譯であります。即ち佛様のお覺りになつた事をその儘打明けられた教が妙法蓮華經である。さういふ意味に採れば宜しい。

それでその過去の佛様が、妙光菩薩に因せて大乘經の妙法蓮華と名くるものをお説きになつた。

せて」といふのは、妙光菩薩を聽手として他の者にもわかるやうに教を説かれる。

佛様の教をお説きになる時はいつでもさうです、大勢の人に説かれるのでありますけれども、結局一人の人を相手にして説かれる。その人がわかつたやうであれば他の人もわかる、その人がわからないやうなら他の人もわからないのですから、教を説く時には、誰か大勢の中の一人をじつと見て説かれる。だから誰か一人を的にして教を説いて、さうして他の人も一緒に聴くやうにといふのが、説法の定まつた形であります。

そこで妙光菩薩といふものを目的として、大乘經、菩薩の道を教へるその經を説かれた。それが「妙法蓮華」といふ經典であつた。妙法蓮華といふのは前にも申したやうに、佛の自ら信ぜられた事をその儘打明けて説かれる。それが妙法蓮華經であります。今私共の讀んで居る妙法蓮華經、こればかりでは

それは菩薩の道を教へたもので、又佛がどうぞそれが世に弘まるやうにと念じて居られた教である。

六十小劫座を起ちたまはず。時の會の聽者も、亦一處に坐して、六十小劫身心動せず。佛の所説を聴くこと食頃の如しと謂へり。

(六十小劫、不起座。時會聽者、亦坐一處、六十小劫、身心不動。聽佛所説、謂如食頃。)

その教を説かれて、六十小劫といふ随分長い年月の間、その座よりお起ちにならなかつた。その時にそこに居つた者共も亦一處に居つて、六十小劫の間、身も心も動かさないで佛の教を聴いて居つた。それが食頃と言つて食事をする間のやうに、極めて短い間のやうに思へた。これは吾々の日常の生活に於ては時間と空間の區別があります。一日二十四時間は長い、一分間は短いといふやうに、時間の間に於て區別がある。一寸か二寸は短い、二里、三里は長い百里、二百里はモット長いといふやうに空間の區別

がある。人間の生活に於ては時間と空間の區別といふものは必ずある。けれども人間の心のはたらきに於ては、時間空間の區別はありませぬ。大きな事を考へたつて心が大きくなる譯ではない、小さい事を考へたつて心が縮む譯ではない。百年の事を考へても一分間の事を考へても、同じ一心の中で考へられる。だから心の覺りに於ては、時間と空間の區別は超越して居る。そこが覺りの尊い所であります。世間の普通の事に於ては時間と空間に支配されますけれども、本當に覺つた時には時間の長い短いといふことは無い、場所の廣い狭いといふことは無い。どんな狭い所に居つても大きな道を行ふことが出来る。どんな短い間に於ても千百年の後までも傳へるといふやうな事を考へることが出来る。だから人間の本當の覺りといふものは、時間と空間を超越して、時間空間の支配を離れる時、そこに本當の覺りといふものがある。これを言つて居るのであります。六十

小劫といふ非常に長い年月も、一瞬間のホンの短い間のやうに思へたといふ。時間と空間の支配を超越して眞の覺りを得た、本當の道を學び得た、斯ういふ事でありませぬ。

是の時に衆中に一人の若は身、若は心に懈倦を生ずるもの有ること無かりき。

(是時衆中、無有一人、若身若心、而生懈倦)

その時に大勢集まつて居る人の中に、一人も身も心も懈倦といつて、モウ疲れた、嫌やになつたといふ心持を起した者は一人もなかつた。これは懈怠といふ懈ける心持から、懈倦といふくたびれたといふものが出て来る。なまける心持がなければくたびれるといふことは無い。そのなまける心持の正反對が精進といふことで、心を一つ所に打込んで、外に心を移さない時に於ては、くたびれたの嫌やになつたのといふことは無い。懈怠といつて、心が他に移つてあの事、この事を考へて居るものだから、ぢきに疲

れてしまふのであります。

それに就いて私共子供の時の事を想ひ出すのですが、小さい時によく私共は螢を取りに行きました。丁度今頃、梅雨になる少し前ぐらゐの時に螢が出ます。早稲田の大隈さんの屋敷の後ろの方などは田圃で、彼處に小さい川が流れて居つたり、草が茂つて居つたりして、彼處によく子供の時に螢を取りに行つた覺えがあります。彼處等の暗闇のいろ／＼な所を歩いたり、細い丸太の橋などを飛び越えたり、田圃の間の危い徑を歩いたりして螢を取つて歩きます。後から考へると、よくあんな危い所を通れたと思ふけれども、螢が取りたい／＼と思ふ一心で、向ふの方に一匹、こつちの方に一匹、ピカ／＼と光つて居る。それを追つて居る時には、危ないナンといふことは少しも思はない、疲れたナンといふことは少しも思はない。夢中で歩いて居る。後になつて見ると、どうしてあんな所を平氣で歩いたかと思ふので

すけれども、その時は少しも疲れたとも思はなければ、危いとも思はない。それは螢を取りたいといふ一心です。その一心に依つて危いこともなければ、疲れも無いのです。

人間のことは皆それでありませぬ。一つの事を一心に努めて居ると、危いこともなければ疲れたこともありません。疲れたの、骨が折れるといふのは一心でないからです。心に弛みがあるから、疲れたと思つたり、危いと思つたり、面倒だと思つたりするけれども、本當に一生懸命になつた時には、疲れも危いものにもありません。それを「懈倦無し」と言つて居る。どうも私共は凡夫でありますので、心があつちこつちに動くものですから、つい疲れたり、つい嫌やになつたり致しますけれども、本當に教を求めるときはたゞ歎びに満ちて居りますから、疲れるといふことは無いでせう。その有様を申して居るのであります。

日月燈明佛、六十小劫に於て、是の經を説き已りて、即ち梵、魔、沙門、婆羅門、及び天人阿修羅衆の中に於て此の言を宣べたまはく。

(日月燈明佛、於六十小劫、説是經已。即於梵魔沙門、婆羅門、及天人、阿修羅衆中、而宣此言)

そこで日月燈明佛が、六十小劫といふ長い年月の間に、是の經を説き已つて、即ち御自分のお覺りになつた事を打明けて皆にお教へになりました。「梵」といふのは淨らかな行ひをする者、「魔」は惡魔、「沙門」といふのは佛の教に歸依した者、「婆羅門」といふのは印度に昔からありました天を祀ることを業とする者、その他天上界の者や人間界の者、阿修羅といふやうなもの、その他の大勢の人々の中に於て斯ういふ事を仰しやつた。

如來今日の中夜に於て當に無餘涅槃に入るべし

(如來於今日中夜、當入無餘涅槃)

如來とは佛様御自分のこと、佛は今日の夜中にモウ

こが哲學や科學とは大分違ふ、學問の方は人間の知識に想へるものだから、必しも實行しなくても、學者としての價値は無くなりはない。經濟學と言ふのは學だから、經濟學者が借金しても大した恥でもない、經濟の學はこの通りだけれども、自分が實行しないで借金してもどうも仕様がな、それはどうも學だから、知識だから仕様がな。生理學者が不養生をして早く死んだつてどうも仕方がない、學だから、實行しなかつた。けれども宗教はさうは行かない、教といふものは、自分がやらないで、「俺は慾張だけれども貴様達無慾になれ」「俺は懶けて居るけれどもお前達勉強しろ」と言つてもそれは教にならない。だから佛様は、教をお説きになる時には必ず御自分の實行されることを教へられるのであります。

そこで佛様はその一代の間に於て出家

お前達と別れて死んで行くと仰しやつた。「涅槃」といふのは場合に依つていろ／＼意味があるけれども、此處では死んで行くこと、モウ永久にお前達と別れるといふことを仰しやつた。

佛様が教を説いてやがてお涅槃になるといふことは、總ての佛様の定まつた道なのです。何故かといふと、宗教は哲學や科學とは違ひます。哲學や科學は學問でありますから、理窟がわかれば宜しい。宗教といふものは人間の教ですから、理窟がわかつたら宜いといふものではなくして、實行しなければ、役に立たない。所が實行するといふことは難しいから、そこで宗教に於ては、教を説く人が自らこれを實行して手本を示して教を説かれる。そこが宗教と學問との違ひです。佛様は決して空論をなさるのではない、御自分の實行される事を吾々にお説きになつて、「自分がこの通りやつたからお前達も自分の通りにやれ」と言はれる、それが佛の説法です。こ

修行の道 成法 入滅

といふ順序を経まして、先づ出家をして、人間の榮華の生活を捨て、それから修行をして、修行の結果、成道といつて覺りを開かれて、その結果教を説かれて、それから教を説き已れば、入滅といつて世を去つて行く。これは皆どの佛様でも同じ事です。たゞ人間としてウツカリして居たんでばつまらないから、その人間の道を學ぶ爲に、出家といつて人生の生活を暫く離れて、それから修行して覺つて、覺つた結果説いて、説き已れば入滅する。世の中を離れて行く。これはお釋迦様ばかりではない、總ての佛様の通つて行らつしやる道は皆同じ事である。

何故それなら佛様は入滅するかと言へば、それはこの法華經をだん／＼讀んで行きますと、十六番目

の毒量品に至つてその事を打明けて居られるのでありすが、いつ迄も一緒に居られるといふ心持は、解ける心持を起す。いつでも佛様は居らつしやるのだ。いつでも聴きたいと思へば佛様の所に行つて聴けると思ふと、今日聴かなくても宜い、明日がある明日聴かなくても明後日があるといふ譯で、つい後へへ送つて、結局修行しないで終るだらう。これは人間の常であります。それだから佛様は或る一定の時期だけ教を説けば、死んでしまつて居なくなつてしまふ。佛様が居なくなると「ア、今まで佛様が居たのが居なくなつたのだナ、居なくなるとすれば、生きて居らつしやる間にモット能く聴いて置けば宜かつたナ」といふ心持が起つて、そこで初めて眞面目に、佛の生きて居る間説かれた所を能く考へて、これを實行するやうな心持になるだらう。だから生きて居る間に教を説いたといふことも慈悲であるけれども、居なくなつて皆の心持を眞面目にして

やるといふこともこれも慈悲である。斯ういふやうに教へられて居ります。

人生に死があるといふことはやはりその意味であります。人間が若し死なかつたならば、人間はどれほど懈け者であるかわからない、いつでも宜いのだといふことになつてしまふ。人生に死があるから吾々は一生懸命になる。親がいつまでも生きて居ると思へば、吾々は孝行をする氣にならない。ところが親はその内に死ぬナと思つたら「生きて居る間に孝行して上げなければ濟まないナ」といふ氣持になる。それで無常といふこと、人間はいつ死ぬかわからぬといふことを考へなければならぬといふのはそのことです。お互ひの間でもその通りです。親子、兄弟夫婦の間皆その通りである。つまりぬお話をするやうですが、私は九つの時に、弟に死別れた、弟は四つで死した、兄弟たつた二人しかなく、その一人の弟に死別れてしまつた。その弟が死ぬ前の日に私は弟

と喧嘩をした。餘所から綺麗な繪を五枚貰つた。私は兄さんだから三枚取つて、弟に二枚やつた。所が弟は三枚呉れと言ふ、私はやらない。「お兄さんだもの、たんと取るのは當然だ、お前は小さいのだから二枚で宜しい」と言ふ。私の母親が又私に最良したものです。「兄さんだから餘計やるのが當然ですよ」と言ふ。弟は、べそを掻いて到頭寝てしまつた。さうしたらその夜中から急に病氣が起つて、後から聴いたら腦膜炎だつたさうですが、翌朝起きたらもう死んでしまつた。私は熱々どうも悪い事をしたナと思つた。こんなに死んで行くならば前の晩に喧嘩をしなければ宜かつた。五枚皆やつたつて宜かつた自分が三枚取つて、弟を泣かした。濟まない事をしたナと思つて、弟の死んだので以て實に自分の我儘を悔いたのです。これは僅に九つの時ですが、その事を今でも想出す。死別れると思つたら泣かすのぢやなかつたナ、荒い言葉を掛けるのではなかつ

たナといふことを想ひ出すのです。併し幾ら想ひ出しててもこれは取返しが付かない。

お互ひの事がさうでせう。今晚死別れるとわかつたら、今日は無理を言はない筈です。つい明日も明後日もあると思ふから、お互ひが無理を言つて喧嘩などをやる。今夜夫婦喧嘩をしてお互ひにブンブンして別れて、さうして翌朝細君が死んで居つたとか亭主が死んで居つたとしたら、「ア、昨日喧嘩をしなれば宜かつたナ」と熱々思ふでせう。喧嘩などをやるのは、いづれ後で又仲直りが出来ると思つて多寡をくゝつて喧嘩をして居る。夫婦喧嘩などは大概さうです。永久に喧嘩をしようと思ひはしない。「いづれ向ふが謝つて来るだらう」と思つて、多寡をくゝつて喧嘩をして居る。それは後まで生きて居けると思ふからである。喧嘩をした後ですぐ死んで居つたら、實を言へば濟まない事ナンです。しかし人生無常です。いつ死ぬかわからぬでせう。だから

本當を言へば今夜死別れするものだと思ふべきです
今夜死別れをするかも知れぬと思つたら無理は言へ
ない。又向ふが無理を言つたつて我慢が出来ない筈
は無い。いつでも「いつ死別れするか分からないも
のだ」とお互ひに考へたならば、無理も言はなけれ
ば、衝突もしなければ、喧嘩も出来ない譯である。
それをつい／＼今夜死ぬと思はない。明日死ぬと思
はない。當分死にはしないナと思つて居るから、お
互ひが無理をするのです。そこが無常を知れといふ
ことです。無常を知れといふことは、なにも世の中
をいゝ加減にしろといふのではない。いつ死ぬかわ
からぬから、生きて居る間に一時間でも、一日でもつ
まらないやり方はしないやうにしよう。どうぞ自分
の我儘を捨て、お互ひに氣持の好いやうにしよう、
斯ういふ事です。それが無常の教です。これは能く考
へなければならぬ事です。縁起の悪い事を言ふやう
ですけれども、斯うやつて集つて居るお互ひが、この

中の誰か今夜死ぬかも知れぬ。斯う言つて居る私が
今夜死ぬかも知れぬ。死んだとしたら「生きて居る
間にモウチット何ぞかして置いたら宜かつた」と思
ふでせう。けれども人生無常です、いつさういふ事
があるかも知れぬ。だから生きて居る間に於て、
一日でもお互ひに氣持よく送るべき筈です。一時間
でもお互ひに我儘を慎しむべき筈です。それでなけれ
ば死んだ後で幾ら後悔をしても追つきはしない。
さういふ事を教へる爲に佛の入滅といふこともあ
る。死ぬといふ事實はその通りであつて、死ぬとい
ふことが人生にあるのは、生きて居る間の一時間を
無駄にするなといふ大きな教訓を與へる爲に死とい
ふ事實がある。斯ういふやうに考へなければなら
ぬ。さういふ譯で過去の佛様も、今夜無餘涅槃に入
るべし、死んで行くのである。だから後の事をお前
達に能く修行しなければならぬと言はれた。
時に菩薩有り、名を徳藏と曰ふ。日月燈明佛

即ち其れに記を授け、諸の比丘に告げたまはく
是の徳藏菩薩、次に當に作佛すべし、號を淨身
多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀と曰はんと。

(時有菩薩、名曰徳藏。日月燈明佛、即授其記、告諸比丘。是徳藏菩薩、次當作佛。號曰淨身、多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀。)

その時に徳藏といふ菩薩があつて、日月燈明佛が
記を授けるといつて、お前は今まで修行して居るか
ら後には必ず佛の境界に到達することが出来るだら
うといふことを認められた。授記といふことは、佛
に成れるぞといふことを認められたことです。さう
して諸のそこに集つて居るお弟子達にお告げになる
のには、今此處に居る徳藏といふ菩薩は非常に修行
の積んだものであるから、今に佛に成るだらう、そ
の時に淨身といふ名前の佛に成るだらうと仰しやつ
た。

「多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀」といふのは、

この前に佛の名前が十あるといふことを申しました
その十の中の一番主なるものは「如来、應供、正徧
知」の三つで、餘はマアつけたりです。そこで餘の
七つを略して三つだけ擧げてあります。

多陀阿伽度……………如来
阿羅訶……………應供
三藐三佛陀……………正徧知

佛授記し已りて便ち中夜に於て無餘涅槃に入り
たまふ。佛滅度の後に、妙光菩薩、妙法蓮華經
を持ち、八十小劫を満てて人の爲に演説す。日
月燈明佛の八子皆妙光を師とす。妙光教化し
て其をして阿耨多羅三藐三菩提に堅固ならしむ
(佛授記已、便於中夜入無餘涅槃。佛滅度後、妙光
菩薩持妙法蓮華經、滿八十小劫。爲人演説。日
月燈明佛八子、皆師妙光。妙光教化、令其堅固。阿
耨多羅三藐三菩提。)

それからその佛様が滅くなつた後に、妙光菩薩が妙

法蓮華經といふ、即ち佛の自ら覺り得た所をその儘に打明けられた一番尊い教を持つてさうして八十小劫といふ永い間人の爲にそれを説き明かされた。さうして日月燈明佛の八人の王子達も、皆妙光といふものを師として道を學んだ。妙光といふ菩薩はその子供達を教へて、皆阿耨多羅三藐三菩提、即ち佛の智慧を求めるといふ心持を弛めないやうに、さういふ心持が途中でグラ／＼しないやうに、嚴重にこれを教へ導いた。

是の諸の王子、無量百千萬億の佛を供養し已りて、皆佛道を成ず。其の最後に成佛したまふをば名を然燈と曰ふ。八百の弟子の中に一人有り號を求名と曰ふ。利養に貪著せり。復た衆經を讀誦すと雖も、而も通利せず、忘失する所多し故に求名と號く。

(是諸王子、供養無量、百千萬億佛已、皆成佛道。其最後成佛者、名曰然燈。八百弟子、中有一人。)

席を譲る。その時にそのお婆さんが「有難うございませう」と言つてお辭儀をして掛けると快い氣持です。それはやはり報ひです。自分が立つたといふことに對しての報酬です。所がそのお婆さん聲で黙つて掛けたとすれば「この婆黙つて居る……立たなければ宜かつた」といふことになる。どうも普通の人間といふものは報ひが無いと承知しない。そこで報酬といふものはいろ／＼ありますが、結局名利の二つです。名前即ち名譽か、でなければ利益です。普通の人間は名、利のどれかを求める。兩方欲しいのは尙更であります。名といふ方は位とか身分とか、勳章を貰ふとか、新聞に書かれるとか、世間の評判が好いとか、これは皆名の方です。利といふのは普通の金を貰ふことでせうが、金でないものでも宜しい。さういふ名利の二つを目的にして人間は努力するので、所がその名利の二つが正しく與へられるかといふと、決して正しく與へられるものではない。人

號曰求名。貪著利養。雖復讀誦衆經、而不忘失。利多所忘失。故號求名。

さうしてその王子達は無量百千萬億の佛を供養した佛を供養するといふことは、佛の教を學んでその教を實行することに努めた。さうして皆その佛の教を實行したから、自分も佛道を成ずるといつて、佛の境界に到達致しました。その最後に佛に成つたものが然燈佛といふ名前の佛に成つた。さうして八百の澤山のお弟子がありました。そのお弟子の中の一人が求名といふ名前であつて、利養に貪著した。

人間の慾望といふものは數限り無くありますけれども、その慾望を二つに分けると名、利の以外には無い。私共はいろ／＼な仕事をする、その仕事に對して報酬が欲しい報酬無しに骨折るといふことは普通の人間には出来ないことである。骨折れば何か報酬が欲しい。電車の中で、お婆さんが入つて来る。「お婆さん此席にお掛けなさい」と言つて、立つて

生は複雑なものでありますから、骨折つても／＼その骨折りが認められない人がある。人に依り時に依ると、そんなに骨折らなくてもどうかして認められる人がある。だから人間の報酬が名利の二つだと思れば、その名利の二つを目的にして仕事をして居つたんでは、本當の仕事は出来ない。何故ならば、認められなければ、折角骨折つても名も與へられず利も與へられない事があるから、その時にガツカリしてしまふ。

凡夫と覺つた人との違ひはそこにある。凡夫は名利を求めて居る。覺つた人は名利を求めないで、自分の骨折が一切衆生の役に立つといふことを目的として居る。そこが違ふ。迷つた人の求むる所は名と利です。覺つた人は何を求めるかといふと、自分の骨折が他の人の役に立つ、所謂利益といふことを求める。誰だつてじつとして居ない、仕事をするのですが、その仕事をする時に、名前か利益の爲に仕事

をするといへばそれは迷つた人、それから名利は考へないで自分の骨折が利益、他の人の爲に役に立つことが嬉しいといへばそれは覺つた人。斯ういふ風になつて行くでせう。世間の人は、利益を眼中に置かないといふことは、難しいやうにまだ易しい、けれども名譽まで捨てるといふことはなかく難かしい。讀められたいといふことは、よほど根の深い欲望らしい。よく死ぬ人が書置を書きますが、あの書置に大概嘘が書いてある。モウ死ぬ時だから本當の事を書きさうなものだけれども、嘘を書いてある。心中などをする時によく書置を書いて居ります、その儘死んでしまへばそれ迄ですが、どうかして助かつた後で調べて見ると、書置に書いてあるこれは大概嘘だといふことです。おかしなもので、人間は死んだ後まで讀められたい。だから死ぬ時にも嘘を書いて死ぬ。人間の名譽心といふものは實に根の深いものです。私共の子供の時に、日光の菩薩滝へ飛込

んで死んだ高等學校の學生があつた。これは實は失戀ナンです。或る婦人に想ひを懸けて、それが他家へ行つてしまつたものだからガツカリして自殺したその時に、失戀の結果死ぬと言はれてはみつともないから、「人生解すべからず、この不可解な人生に生きて居るのはつまらない」といふやうなことを書いて飛込んでしまつた。ナニニ人生でもなんでもありはしない。女一人の爲です。私はその事情をよく知つて居る。さういふもので死んだ後まで讀められたいといふ變な事なのです。ところがそんな事を言つて死んだものだから、それにかぶれて瀧壺へ飛込む者が多勢出來た。どれ程世の中に迷惑を掛けたか知れない。實に人間の名利の念といふものは恐しい死ぬる時まで名前が欲しい。さうして一人の者が名前を飾つて死ぬと、他の者までかぶれるといふのですから、これは厄介な話ですが、それがマア人間の凡夫の常です。そこを離れなくてはいけない、名前

が欲しい。利益が欲しいと思ふと、それが自分一身の累ひになるのみならず、世の中にまで累を及ぼすことになる。この名利を離れる所に本當の覺りがあるるのであります。

それを此處に言つて居る。「求名」といふ弟子があつたといふのは、これは本當に覺らない前は皆それです。「利養に貪著せり」で、餘所の人が自分に利益を與へて、自分を裕かにして呉れさうなものだと思つて居つた。さうなると多くの經を讀んで見ても「通利せず」で、本當の意味がわからない。自分に名譽心、利益心がある間は、教を聴いても教の本當の意味がわからない。自分に都合の好い事はばかり聴いて居る。これは實に面白いものだと思ふ。人間といふものは教を聴きましても、その教の全部を聴かないのです。自分に都合の好い方だけ聴く、だから教を幾ら聴いても本當のものになりはしない。私は時々下町へ行つて、店の小僧さんや若い人の

集まつた所で話をすることがあるのですが、日本橋の方の或る所で、小間物や雜貨店の店員などの集まつた所で話をした事がありました。所が翌日になつて、或る雜貨店の店主が私の所へ談判に來た。「あなたはどうもいけない、若い者の氣に入るやうに思つて不健全な事を言つて怪しからん」と言ふ。私はそんなに若い人を嫌つたつもりはないが、どういふ譯ですと言つて聴いて見たら「昨夜私の店の小僧があなたの話を聴いて店へ歸つて言ふには、人を使ふならば人格を重んじて、無暗に使つてはいけないといふことを先生が言つた、あなたはどうも人格を重んじないで困る、斯う言ふ。あんな事を言つて貰つてはごうも小僧が増長していけない。これから氣を附けて呉れ」といふ話です。それから私は、どうもそんな事を言つた覺えは無い、どうしたのだらうとだん／＼考へて見ると、想ひ出した私は斯ういふ事を言つた。「人間はお互ひに重んじ合はなければ

ならぬ。互ひに察し合はなければならぬのだから、使ふ人は使はれる人の人格を重んじて、無理な使ひ方をしてはいかぬ、使はれる人は使ふ主人の氣苦勞を察して、我儘をしてはいかぬ」斯ういふ事を私は言つた。あなたの店の小僧さんは半分だけ家へ歸つて話したのである。使はれる人はといふ方は抜きにしてしまつて、人を使ふには人格を重んじろ、これだけを主人に取次いだ。話半分だからどうもこれはうまく行かない譯です。そこで私はその主人に言つた。「實は斯ういふ譯だ、僕はそんな偏つた事を言つたんぢやなくて、使ふ人と使はれる人どがお互ひに察し合つて、お互ひに重んじ合はなければいけないといふ話をしたのを、あなたは小僧さんから半分だけ聞いたんだらう」と言つた所が、「ア、さうですか」といふ譯で初めてわかつた。「どうも濟まない事をしました」と言つて謝つた。向ふが謝るとこつちも氣が強くなつて「全體あなたは小僧ばかり寄し

得て、供養恭敬尊重讃歎せり。

(是人亦以種種善根、因緣故、得值無量百千萬億諸佛、供養恭敬、尊重讃歎)

所がこの人が亦諸の善根を種ゑたところの因縁に依つて、結局は數限り無いところの佛に値ひ奉つてそれに供養し、敬ひ重んじて、その佛を讃歎して、つまりは自分も佛に近づくことが出来た。人間はどうせ缺點があるのだから、缺點のあるのは仕方がない。その缺點を自ら認めて矯しさへすれば宜い。此文はその事です。初めは名譽や利益を重んじて居つたが、その人が、自ら「これは悪かつた」と氣がついて、佛につかへ、佛を讃め、佛を敬ひ、佛に歸依する氣分が起きるといふと、結局は自分もやはり佛の境界に行けるといふのであります。悔ひ改めるといふこと無しには人間は進歩しないこれを慚愧と申します。人間は佛に成るまでの間は慚愧といふことを忘れてはいけません。慚愧といふの

て、自分が聴きに來ないから、そんな間違ひが起る自分が小僧さんと一緒に聴きに來ればこんな間違ひは起らないのだ、これから氣を附け給へ」と言つてやつたのであります。さういふ人が世の中に多い教を聞いたつて、人の話を聞いたつて、半分だけ、自分に都合の好い方だけ聴いて居る、それでは本當の事はわかるものではない。自分を捨てなければどんな善い教でもものになりはしない。

その事を此處で言つて居る。名利の慾があつて、名が欲しい、利が欲しいと言つて居る間は、どれだけお經を讀んでも、どれ程尊い教を聴いても、「通利せず」で、その意味が本當にわからない、その理義に通達しない。「忘失する所多し」で、忘れることが多い、自分に都合の悪い事は皆忘れてしまふ。それ故に「求名」と名けた。

是人亦諸の善根を種ゑたる因縁を以ての故に無量百千萬億の諸佛に値ひたてまつることを

は自分で足らないと思ふ心持。「慚」といふのは自ら省みること「愧」といふのは他に比すること、これを兩方やらないといけない。自分で考へて、俺はまだ足らないナと思ふ。それが慚です。それから他の人に比べて、他に自分より勝れた人がある、あの人に比べると自分は足らないナと思ふ、それが愧です。慚と愧となければいけない。自分一人で考へて居る間は本ものでない、自分で考へて足らないことを知り、又他の人に比べて足らないことを知る。そこでいつでも吾々は慚と愧に依つて自己を進歩せしめて行くのであります。その慚愧が無くなるといふとモウそれで行止まりです。だから無慚愧といふのが一番いけない。少しばかり物を知つて居つて、少しばかり善い行ひをしても、無慚愧では仕様がななくて澤山だと思つたら行止りです。だからお釋迦様はよく仰しやる。無慚愧の徒はいけない奴だ、振返ることを知らない者は仕様がなといふことをい

つでも言はれる。この無慚愧といふ言葉が無慚愧といふ言葉になつて日本の俗語にも遣つて居ります。無慚といふのは一番悪い事です。それが又この頃では少し言葉が變つて、人に殺されたりなにかしたことを無慚なことだ「無慚と言ふも愚かなり」などと云ふけれども、それはだん／＼言葉が轉じたのでありまして、根本に於ては無慚愧といふことはいけな振返るが宜しい。振返つて自分の足りない所に氣が附けば、縦ひ今は足らなくても、やがては善い者になるのでありますから、その事を言つて居ります。名利を求めてつまらぬ者であつたけれども、だんだん考へて、自分の悪かつた事を知つて、さうして諸の善根を種ゑて、數限り無き佛様に仕へて、佛様をお讃め申すやうな心持になつたから、結局は覺りを開くやうになつたといふのであります。

彌勒當に知るべし。爾の時の妙光菩薩は豈に異人ならんや。我が身是なり。求名菩薩は汝が身

一生懸命になつて難り聽いたら宜からう。斯ういふことを文殊菩薩が申したといふのであります。これが先づ序品の全體でありまして、これから大衆が文殊の言葉に依つて心を改めて、「これからお釋迦様がお覺りになつたその儘をお説きになるさうだ」といふので、氣分を改めて聽くといふことになつて、これからお釋迦様が靜かに起つて、御自分のお覺りになつた事をお説きになるといふ順序になつて行きます。

茲まで讀みましたから、前から申した事を少し繰返して見ませう。それは方便を捨て、眞實を説くといふことです、今までは方便であつたが、これからは眞實の教を説くといふことになるのであります。その方便の教といふのは何かといふと、

方便……………隨他意

眞實……………隨自意

他意とは聽く人の心持、自意とは佛の心持でありま

是なり。今此の瑞を見るに、本と異なること無し。是の故に惟付するに今日の如來も當に大乘經の妙法蓮華、教菩薩法、佛所護念と名くるを説きたまふべしと。

(彌勒當に知る。爾時妙光菩薩、豈異人乎。我身是也。求名菩薩、汝身是也。今見此瑞、與本無異。是故惟付、今日如來、當説大乘經、名妙法蓮華、教菩薩法、佛所護念)

そこで彌勒よ、その時の妙光菩薩といふのは他の人ではない。今の我が身(文殊)自分である。その時の求名菩薩といふのは彌勒お前である。お前は今自分より後から覺りを開くのであるが、お前は前の世に於てさういふ風に名利を求め心持があつたけれども、その心持が亦矯つて斯うなつたのである。

今この有様を見ると、本の有様と異はない、この故に惟し付つて見ると、今日の如來、お釋迦様も、必ず大乘經の妙法蓮華、教菩薩法、佛所護念と名くるものをお説きになるだらう。だからこれから皆

す。聽く人の心持に應じて、低い者には低いやうな教を説きそれより少し高い者には高い教を説くといふ。これが方便であります。これは教を説く方法手段であります。けれども方便ばかりやつて居つてはいけないから、結局は隨自意といつて、佛様御自身の心持の通りを打明けて説かれる。それが眞實の教といふことになる。それで法華經といふものは佛様のお心持をその儘打明けられたのだから、これは眞實の經だと言はれる。それから他の教は、それ／＼尊い教だけれども、聽く人の境遇に應じ、聽く人の程度に應じて説かれたのであるから、それは隨他意の教、即ち方便の教だ、斯ういふやうに區別される譯であります。

そこで方便は眞實の教より劣るといふやうに思つてはいけない。いづれも佛の慈悲から出て、佛の慈悲を以て一切の人を照すので、さうしてまだ本當の事を言ふには早いと思へば低い方の教を説かれる

それからだん／＼機根が熟して、いよ／＼本當の事を言つて宜いと思へば本當の教を説かれるのでありますから、方便も亦佛の慈悲の現れ、眞實の教も亦佛の慈悲の現れである。斯ういふやうに解釋しなければならぬ。佛のお説きになる事は一つ／＼皆尊い。低い教を説いてもそれは高い教に行く順序でありますから、皆尊いのであります。

それで今度は聽く人に對する佛様なり或は菩薩なりの態度を申しますと、聽く人の行つた事に一つでも善い事があれば必ずこれを獎勵される。お前のやつた事は善い事だ。だからそれをモット續けて行つて、モット善くなれといふ風に獎勵される。それが「攝受」の教、攝受といふのは受け容れるといふこととて、チョットでも善い事をすれば佛様がそれを認めて下されて、お前の今やつた事は善い事だから、どうぞその善い事を小さい事だけに止めないで、モット大きくして、モット更に善い事をやつて呉れと

となければならぬ。場合に應じて、攝受して宜い時には攝受する、折伏して宜い時には折伏するのであります。その攝受と折伏の教といふものは結局皆慈悲心から出る。どうぞ總ての人を完全無缺なものにしてやりたいといふ慈悲心から、或る場合には攝受となつて人の善い事をお褒めになり、或る場合には折伏となつて過ちを厳しく責められる。これは皆慈悲心から出た事でありませう。その所は餘程考へなければいけない。

日蓮聖人の當時に於ては、世の中に間違つた教を弘める者が多かつたから、聖人は主として折伏をなさつた。併ながら折伏をなさつたといふことは攝受が出来ないといふことではない。間違つた人間を攻撃するといふことは、その人間が正しい道に入つて来れば、出来るだけこれを獎勵して、奨めてやることいふ、その徳があつて初めて折伏が出来る。人に叱言を言ふ人は、それが善くなつたら獎勵してやると

いふ風に奨められる。それが攝受の教であります。それから若し間違つた事があれば、それを指摘してその所は悪いのだから、その悪い事を矯してモット善くなれと教へられる。これが「折伏」の教であります。日蓮聖人も仰しやつたやうに、佛の教といふものは二つの道がある。攝受と折伏である。攝受といふのは人の善い事を善いと認めてこれを獎勵される教である。折伏といふのは過ちを過ちと認めてこれを矯させる爲に教を與へられる。人間の教といふものは、佛様の開いた道と同じ事でありまして、二つしかないものであります。善を善と認めてこれを獎勵する仕方と、惡を惡として認めてこれを除かれる爲に骨折るといふことと、この二つしかない。これが揃はなければいけない。善い方ばかりやつて居つて悪い方を宥して居ては決して完全にならない。或は悪い方ばかり叱言を言つて、善い所を認めないで居るとガツカリしてしまふ。いつでも攝受と折伏

いふだけの徳がなければいけない。叱言ばかり言つては何にもならない。だから折伏する人は攝受がなければいけない。人を攻撃する人は、人の善い事を獎勵する力がなければならぬ筈であります。たゞ缺點ばかり探して居るといふのはいけない事でありませう。攝受といひ、折伏といひ、皆これは慈悲心の現れである。斯ういふことを能く考へて見ないといけません。私共もつい缺點ばかり探すやうになります。缺點ばかり探したのではいけない。人の缺點を探すなら、それが善くなつたらその善くなつたのを獎勵して、モット善くしてやるだけの力がなければ、人の攻撃をしては濟まない譯であります。皆これは慈悲心の現れであります。

それでお釋迦様の御一代がそれでありませう。法華折伏と言つて居ります。これは支那の天台大師の言葉であります。法華折伏といふのは、法華といふ經典は、お釋迦様のお心持を打明けられた經である

のだから、これを本にして、これより低い教は、それではまだ本當ぢやないぞと言つて教へる。これが法華折伏であります。折伏といふことは、人の足りない所を示してモット完全にすることナンですか、例へば二階に昇る階段があつて、その階段を昇り詰めれば二階に行ける。階段の途中に止まつて居る人がある。そこで上に居る人が言ふ、「オイ、お前馬鹿ぢやないか、階段の途中に止まつてどうするのだ、階段は上に昇る爲の階段だから、階段の途中に止まつて居つてはいけないぞ、それを昇り切つて上まで来い」と言ふ。それが折伏であります。お前のはまだ不完全である、それでは本ものではないから、その間違つた事を矯してモット完全になれと言ふ。それが折伏です。ですから折伏といふことは人を捨てることではなくして、人を救ふことです。不完全な事を示して更に完全にならしめること、それが折伏です。階段の途中に立つて居る人に大きな聲

ければならぬ。これからだん／＼讀んで参りますが、お釋迦様の教といふものはいつても慈悲心から出て行くので、人を勵ますのも慈悲の現れ、人を責めるのも慈悲心の現れである。要するに不完全な一切衆生を救つて佛の境界に到達せしめるといふ、この大慈悲心の現れが種々な教になつて現れて來るのであります。佛の教を學ぶ私共も、これを自分の心持としなければならぬ。勵ますべきは勵まし、攻撃すべきものは攻撃するけれども、その褒めるのも、惡く言ふのも、結局は彼を完全なものにしてやらうといふ慈悲心の現れである。斯ういふ場合に初めて責めるにも意味が有り、褒めるにも意味が有る。その慈悲心が無いならば、褒めるのは諂ひになり、責めるのはたゞの攻撃になつてしまふ。そこは餘程注意しなければならぬ點と思ひます。

(第十四講了)

で「馬鹿ツ」と言つて怒鳴るのは、それを突き落す爲ではない、馬鹿と言つて氣を付けさせて、上まで引上げるのである。それで折伏といふことはいつても人を引上げるのである。人を救ふことであるといふことを忘れてはならない。他の者を攻撃して排斥するならば、それは慈悲でもなんでもない。すべて私共が人を責めるといふ場合には、責めてそれを社會の外に弾き出すのではなくて、責めて矯させてそれを引上げてやるといふこの慈悲心を失つては人を責めるといふこの意味が無い。それが攝受と折伏とのハッキリした區別であります。どんなに人を攻撃しても宜い、たゞ攻撃してその人を蹴飛ばして排斥するのではない。攻撃して矯さして、さうしてその人を引上げてやるといふ慈悲心があるならば、どんなに攻撃しても宜しい。その慈悲心が無くして攻撃するといふことは羞しいことであり、また人間として洵にみつともない事であること考へな

謹告

左記の通り舉行仕候間御一同御誘合せ御參詣相成度候

釋尊非滅現滅會
日蓮聖人御生誕會 法要並大講演會
本部開館第三周年記念

一日時 二月十一日午後一時半(法要)二時(講演)
一會場 統一會館階上(法要) 講堂(講演)

一講師 日蓮聖人の歴史觀
中央大學教授 小林一郎先生
文理科大學教授 松本彦次郎先生
法學博士

主催 財團法人 統一團
以上

追而當日來會者へ本多上人著「日蓮聖人」寄部贈呈
電話千五三三六番

記事

本部團報

新年會 正月七日吉例に依つて新年會を本部に開演した。此日天気快晴で、昨日の寒の入りにも拘らず極めて陽春麗かたで全都を賑はした。

本部の御賓前左右には國旗と團旗が奉揚され、一入莊嚴の零團氣を漂はせられてゐた。午後四時頃よりボツ／＼來會者あつて定刻五時には、佛間も會議室も滿員の盛況で、和氣蕙々虚空會の觀に近いヒントを與へらるゝのであつた。やがて文學士小西日喜曾都唱導の師となり、和賀、梶木、山口等牧務の諸師臨士となつて、薰香の充溢せる中に悉く國禮會が度修された、恐らく其の隨唱の梵音は高く雲上にも達したであらう。

直つて一同講堂に下り、これより第二の幕に入る。曠部常任理事先づ開會の辭を述べ、次で上田理事長は別項の挨拶あり、爾後梶木顯正師推されて司會者となり、來賓佐藤卓藏

中務、岩野直英少將並に井上清純男等に依り前掲の卓設を聽聞し終つて開演に入る。

各位著を執りつゝ一方に感想を談す、初めに河合彰明氏起ち、次に遙々靜岡より來會された福岡駒雄氏の御決心を聽き、次に鎌倉の松木喜八郎氏の御感談、それより北條平太郎先生の御主張に耳を傾け、次に漸く着座された小林一郎先生の無礙辯に一同の反省を促された。最後に小西日喜師の開會の辭で結ばれたのは午後八時半であつた。

岩野將軍の發聲で讀んで、陛下の萬歳を三唱して幕を閉ぢた。來會者八十餘名 有難い事であつた。

法華經講座 一月十日第二木曜日晚から開講された。彌々如來菩薩品に入つたので自他一層の緊張味が滿堂に旺盛してゐる、此際一人でも多く來會されんことをお勤めする。

日曜日集會 十三日第二日曜日から開かれて定例の如く法蓮が張られた。當日の擔任は左の通りであつた。

年頭に際して法國を憶ふ 河合彰明氏
神道と法華經 小西日喜師
二十日

大藏經要義講話 梶木顯正師
船守彌三郎と日妙上人 中村清一氏

横濱教誌

十二月中當地の法宴は次の通りであつた。

○四 日夜 神奈川區篠原町西村氏方に「一偶一句に神を榮めて」曠部先生。
○九 日夜 磯子町高橋氏方にて、和賀師及曠部先生の御法話。

○十二 日夜 神奈川區鶴岡町東田氏方にて。
○十三 午後三時程々各區峰岡町平岡氏方にて、小西師の御法話。

○十五 日夜 中區山田町和田氏方にて。
○十六 日夜 神奈川區榮町石毛氏方にて。
○廿二 日夜 弁土谷の日山氏方にて。「子は實」曠部先生。

○廿三 日夜 磯子町高橋氏方にて、曠部先生令夫人の百ヶ日法要後、小西師及び和賀師の御法話。

○廿七 日夜 神奈川區三澤町齊藤氏方にて。小西師法話及曠部先生の参加ありて本年の最終會とす。

二本松教信

十二月十五日 救濟事業二本松佛敎不榮會托鉢修行。
同 十八日 夜於蓮華寺題目講修行。
同 十九日 午後七時十一分二本松講通過せる職死者遺骨六基に讀經見送る。
同 廿五日 歳暮に付き貧困者一門に施米す。
同 廿六日 同 前

新加盟者

横濱市保土谷區岩間上町 川嶋清稔殿
南洋ニアン島有 吉市六殿
東京府下立川町 岩崎清八殿
岡山縣淺口郡連島町 金森義男殿
東京市日本橋區箱崎町 松本宮子殿
同 品川區五反田 櫻井しげ子殿
横濱市保土ヶ谷區峰岡町 吉村賴治殿
(曠部氏御紹介)
福島市森合孤塚 夏谷江南殿
(中村美津氏御紹介)

寄附金維持及團費誌料領收

(自九九年十二月十八日
至十年一月二十日)

一金五圓也	東京 多田房太郎殿	一金壹百圓也	同 國原 忠三殿
一金貳圓貳拾錢也	山口縣 津田 信子殿	一金貳圓也	同 加藤重太郎殿
一金貳圓五拾錢也	京都 金光 日心殿	同 同	同 万城 登殿
一金六圓也	遠州 山本 通辨殿	同 同	同 横濱 中村 清一殿
一金參圓五拾錢也	横濱 中村 治正殿	同 同	同 東京 伊藤 正信殿
一金貳圓四拾錢也	川口 伊坂さ子殿	同 同	同 東京 森川 泰修殿
一金貳圓貳拾錢也	東京 石川 顯隆殿	同 同	同 東京 飯島 昭二殿
一金壹圓貳拾錢也	同 大塚 誠殿	同 同	同 東京 石川 隆一殿
一金拾圓也	愛知縣 戸松 あと殿	同 同	同 小峰 豐子殿
一金壹圓貳拾錢也	大阪 山乃神傳道閣殿	同 同	同 同 笠原 花子殿
一金貳圓五拾錢也	同 櫻井惣右衛門殿	同 同	同 同 同 同 同 同
一金貳圓貳拾錢也	名古屋 石上 愛子殿	同 同	同 同 同 同 同 同
一金壹圓貳拾錢也	水戸 前刀 實清殿	同 同	同 同 同 同 同 同
一金貳圓貳拾錢也	東京 西村 正殿	同 同	同 同 同 同 同 同
一金壹圓貳拾錢也	愛知縣 藤平 惣助殿	同 同	同 同 同 同 同 同
一金貳圓貳拾錢也	萩 岩崎 又雄殿	同 同	同 同 同 同 同 同
一金貳圓貳拾錢也	東京 釋 眞 誓殿	同 同	同 同 同 同 同 同
一金壹圓貳拾錢也	宮城縣 野々村好二殿	同 同	同 同 同 同 同 同
一金五圓也	東京 神原 久遠殿	同 同	同 同 同 同 同 同

一 金貳圓五拾錢也	同	三須久三郎殿	一 金參圓也	東京	萩田淺次郎殿
一 金六圓也	同	池田悦太郎殿	一 金貳圓五拾錢也	同	宮下きく子殿
一 金貳圓貳拾錢也	名古屋	彌重 庸哉殿	一 金參圓也	同	村松きくの殿
一 金貳圓貳拾錢也	同	彌重まさ子殿	一 金貳圓四拾錢也	奈良縣	笠目 善春殿
一 金貳圓貳拾錢也	同	神谷てい子殿	一 金貳圓五拾錢也	岡山縣	金森 義男殿
一 金貳圓貳拾錢也	京都	有田 安道殿	一 金貳圓也	岩手縣	鈴木 源八殿
一 金壹圓貳拾錢也	鳥取縣	長岡 義貞殿	一 金貳圓貳拾錢也	高岡	林 長 吉殿
一 金壹圓貳拾錢也	東京	能勢 頼武殿	一 金貳圓貳拾錢也	東京	有田 日建殿
一 金壹圓貳拾錢也	同	目黒駒太郎殿	一 金六圓也	同	細川 永殿
一 金貳圓五拾錢也	同	久野 柳子殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	寺澤 直人殿
一 金五圓拾錢也	名古屋	名古屋	一 金貳圓貳拾錢也	同	笠岡 信吾殿
一 金五圓也	豊田織布菊井工場殿		一 金貳百圓也	同	笠岡 信吾殿
一 金貳圓貳拾錢也	廣島縣	村上 信夫殿	一 金貳圓貳拾錢也	大阪	綾仁 興三殿
一 金貳圓貳拾錢也	鳥取縣	後藤 友藏殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	水本 參議殿
一 金貳圓貳拾錢也	愛媛縣	福永治三郎殿	一 金貳圓五拾錢也	横濱	吉村 頼治殿
一 金貳圓也	東京	沼部彌太郎殿	一 金拾圓也	足利	山口 維造殿
一 金貳圓五拾錢也	同	天野 辰子殿	一 金壹圓貳拾錢也	東京	松井 泰一殿
一 金壹圓五拾錢也	同	大谷種次郎殿	一 金拾圓也	東京	小川 吉助殿
一 金壹圓也	同	越山堆四郎殿	一 金拾圓也	同	藤波 芳松殿
一 金貳圓貳拾錢也	札幌	田邊松二郎殿	一 金拾圓也	同	
一 金貳圓貳拾錢也	福島	伊藤 乙女殿			
一 金貳圓貳拾錢也	三重縣	伊東 寛殿			
一 金壹圓貳拾錢也	大阪	富田 清子殿			

右難有入帳仕候世

財團法人統一團會計

念 告

從來本部に於ては正團員も單なる本誌購讀者も同一金額を以て御清撥相仰せ居申候處彌々時代の趨勢に鑑み爰に本團は先づ本誌の増大を圖ると共に正團員と諸友とを區別すべき必要相逼り申候に付本誌巻頭略則御譲承の上爲法國爲一切衆生可相成團員として何卒御賛助あらんことを偏に奉願謹候

財團 統一團

本多日生上人著書 特價提供

- 一 聖 語 錄 改版 特價共 金壹圓八拾錢
- 一 日蓮主義本領 特價共 金貳圓拾錢
- 一 法華經要義 賜天覽 全 金貳圓五拾錢
- 一 日蓮主義心髓 全 金壹圓九拾錢
- 一 日蓮主義精要 全 金貳圓五拾錢
- 一 佛教の本質と其價值 全 金五拾錢
- 一 法華經要品 全 金參圓廿五錢
- 一 日生上人レコード 全 金壹圓七拾錢
- 一 本多日生上人 全 金拾錢
- 一 勤行作法 全 金拾錢

以上施本用として多數御引取には特別便宜御相談申上候

東京市小石川區音羽町六一ノ七
財團 統一團 出版部
振替東京九四〇番

一月「教」誌
一 刊「教」誌

東京市小石川區音羽町六一ノ七
「教」

發行所
振替東京一〇九四〇番

定價一冊 金壹圓貳拾錢
送前金 金五拾錢
送前金 金壹圓貳拾錢

統一團 定價一統
一冊 金貳拾錢 送料壹錢
一ヶ年 金壹圓貳拾錢 送料共
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

昭和十年一月廿四日 印刷納本
昭和十年二月一日 發行
(第四百七十九號)

東京市小石川區音羽町六一ノ七
編輯兼 發行所 磯部 滿 事
印刷人 鈴木 日 雄
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所 都 印刷所
電話高輪六〇二四番

東京市小石川區音羽町六一ノ七
發行所 財團法人統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番



目 次

聖訓摘要	………	野口	生	日	上	人
本尊講章	………	野口	生	日	上	人
日蓮教學講座(第十七回)	………	野口	生	日	上	人
實在の根本原理(其二)	………	野口	生	日	上	人
人生と法華經	………	野口	生	日	上	人
非滅現滅の夕	………	野口	生	日	上	人
歌詠	………	野口	生	日	上	人
法華經講話(第十五講)	………	野口	生	日	上	人
記事	………	野口	生	日	上	人
○各地教信	○寄附團費誌料領收					